

# エジプト学研究第 19 号 2013 年

The Journal of Egyptian Studies Vol.19, 2013

## 目次

〈序文〉	吉村作治	3
〈調査報告〉		
2012 年 太陽の船プロジェクト 活動報告	黒河内宏昌・吉村作治	5
エジプト ダハシュール北遺跡発掘調査報告－第 18 次発掘調査－	吉村作治・矢澤 健・近藤二郎・西本真一	15
第 3 期アメンヘテプ 3 世王墓壁画保存修復プロジェクト概報	吉村作治・西坂朗子・高橋寿光	43
アメンヘテプ 3 世王墓壁画に使用された顔料の化学分析	高橋寿光・西坂朗子・阿部善也・中村彩奈・中井 泉・吉村作治	59
アメンヘテプ 3 世の石棺蓋の保存修復作業概報	吉村作治・苅谷浩子・西坂朗子・高橋寿光	97
第 5 次ルクソール西岸アル＝コーカ地区調査概報	近藤二郎・吉村作治・柏木裕之・河合 望・高橋寿光	107
エジプト国家形成期の集落址調査－ヒエラコンポリス遺跡 HK11C における近年の発掘調査－	馬場匡浩	121
〈論文・研究ノート〉		
ナイル川下流域における石製容器の出現と展開に関する一考察－模倣と技術からみたその系譜－	竹野内恵太	135
〈卒業論文概要〉		
ナイル川下流域における石製容器からみた初期国家形成の様相 －先王朝時代から第 1 王朝時代を対象として－	竹野内恵太	151
古代エジプト・建造物の天井に残されたネクベト画像の考察	大橋陽子	159
〈活動報告〉		
2012 年度 早稲田大学エジプト学会活動報告		167
2012 年 エジプト調査概要		171
〈編集後記〉	近藤二郎	177

# The Journal of Egyptian Studies Vol.19, 2013

## CONTENTS

Preface	3
Field Reports	
Report of the Activity in 2012, Project of the Solar Boat .....Hiromasa KUROKOCHI and Sakuji YOSHIMURA	5
Preliminary Report on the Waseda University Excavations at Dahshur North: Eighteenth Season .....Sakuji YOSHIMURA, Ken YAZAWA, Jiro KONDO and Shinichi NISHIMOTO	15
Report on the Conservation Work on the Wall Paintings in the Royal Tomb of Amenophis III (KV 22) .....Sakuji YOSHIMURA, Akiko NISHISAKA, and Kazumitsu TAKAHASHI	43
Chemical Analysis of the Pigments Used in the Wall Paintings of the Royal Tomb of Amenophis III .....Kazumitsu TAKAHASHI, Akiko NISHISAKA, Yoshinari ABE, Ayana NAKAMURA, Izumi NAKAI and Sakuji YOSHIMURA	59
Report of the Conservation of Sarcophagus Lid of Amenophis III .....Sakuji YOSHIMURA, Hiroko KARIYA, Akiko NISHISAKA, and Kazumitsu TAKAHASHI	97
Preliminary Report on the Fifth Season of the Work at al-Khokha Area in the Theban Necropolis by the Waseda University Egyptian Expedition .....Jiro KONDO, Sakuji YOSHIMURA, Hiroyuki KASHIWAGI, Nozomu KAWAI and Kazumitsu TAKAHASHI	107
Excavating Settlement site in the era of Ancient Egyptian State Formation: Recent Excavations at HK11C, Hierakonpolis	121
Articles	
Some Remarks on the early development of the Stone Vessels in the Nile Valley .....Keita TAKENOUCI	135
Summary of the Recent Undergraduate Theses	151
Activities of the Society, 2012-13	167
Brief Reports of Fieldworks in Egypt, 2012	171
Editor's Postscript	177

# エジプト ダハシュール北遺跡発掘調査報告

## －第18次発掘調査－

吉村 作治<sup>\*1</sup>・矢澤 健<sup>\*2</sup>・近藤 二郎<sup>\*3</sup>・西本 真一<sup>\*4</sup>

### Preliminary Report on the Waseda University Excavations at Dahshur North: Eighteenth Season

Sakuji YOSHIMURA<sup>\*1</sup>, Ken YAZAWA<sup>\*2</sup>, Jiro KONDO<sup>\*3</sup>, Shinichi NISHIMOTO<sup>\*4</sup>

#### Abstract

The mission from the Institute of Egyptology, Waseda University, under the direction of Prof. Dr. Sakuji Yoshimura and Ken Yazawa as field director, conducted fieldworks at Dahshur North in 2009 (18th). In this season, the excavation was continuously concentrated on the area around the Ramesside tomb of *Ta*. Four shaft tombs were investigated, two of them are dated to the Middle Kingdom and the others to the New Kingdom.

From the Shaft 84, at least three wooden anthropoid coffins, dated to the New kingdom, were found. Shaft 94 has no object except hemispherical cup and funnel necked globular jar, typical in the Middle Kingdom. From the Shaft 105, a lot of beads, amulet, pieces of inlaid ornament, stone vessel, amphorae and shabtis were discovered. Amphorae were dated to the reign of the Ramesses II. From the Shaft 106, limestone stela-shaped chapel, canopic jars, a door fragment of wooden model house, faience model offerings and frog statuette were discovered.

With the previous excavations, the result could be a great contribution on understanding of the burial practice in the later Middle and New Kingdoms in the Memphite Necropolis.

#### 1. はじめに

早稲田大学エジプト学研究所によるダハシュール北遺跡の調査隊は、1995年の新王国時代第18王朝末の「王の書記イバイ」という人物の「トゥーム・チャペル（神殿型平地墓）」の発見を皮切りに、「パシェドゥ」、 「タ」のトゥーム・チャペルとその周辺に点在する数々の新王国時代の墓を発見してきた。2004年以降は「タ」のトゥーム・チャペルとその周辺に広がるシャフト墓、単純埋葬の調査を続けており、中王国時代と新王国時代の未盗掘墓が発見されるに至った。その後の調査で、この遺跡は新王国時代だけでなく、中王国時代の墓域も数多く存在することが分かってきた。両時代の埋葬習慣の解明が、本遺跡を対象とする研究の主要な

\* 1 早稲田大学名誉教授

\* 2 早稲田大学エジプト学研究所招聘研究員

\* 3 早稲田大学文学学術院教授

\* 4 サイバー大学世界遺産学部客員教授

\* 1 *Professor Emeritus, Waseda University*

\* 2 *Invited Researcher, Institute of Egyptology, Waseda University*

\* 3 *Professor, Faculty of Letters, Arts and Sciences, Waseda University*

\* 4 *Visiting Professor, Faculty of World Heritage, Cyber University*

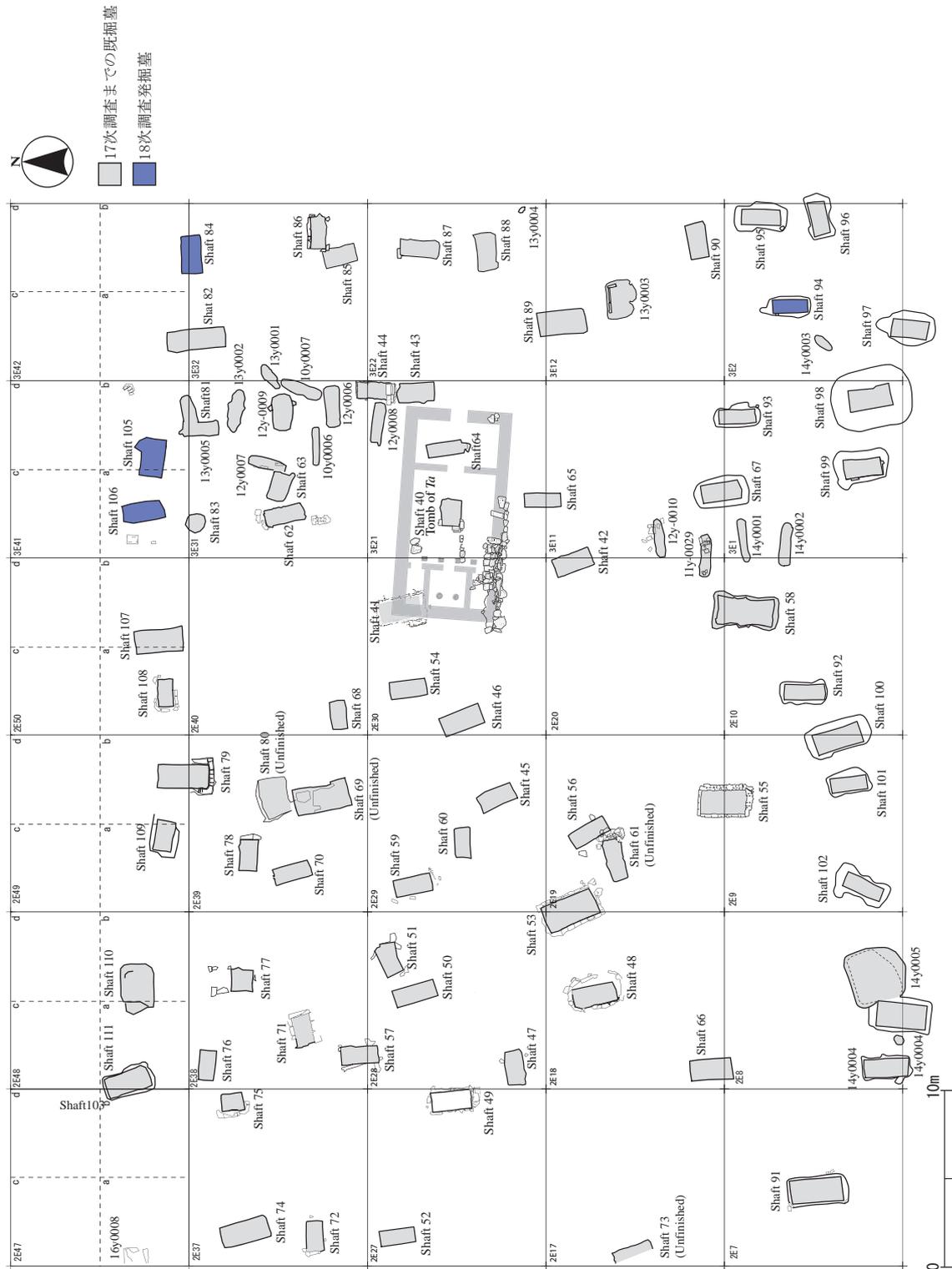


図1 ダハシュール北遺跡調査区  
Fig.1 Map of the excavation area around the tomb of Tz

テーマとなっている。

2009年の10月17日から11月5日にかけて実施された第18次調査ではダハシュール北遺跡の墓域のほぼ西端に位置する「タ」のトゥーム・チャペル周辺の様相を明らかにすることを目的として、「タ」墓周辺における発掘調査を継続した(図1)<sup>1)</sup>。トゥーム・チャペルの北側に位置する3基のシャフト墓(シャフト84、105、106)と南東に位置する1基のシャフト墓(シャフト94)の合計4基の発掘を行った。中王国時代と新王国時代のシャフト墓であり、両時代における埋葬習慣や当時のメンフィス地域の様相を知る手がかりを補強することができた。本稿はその成果の概要報告である。

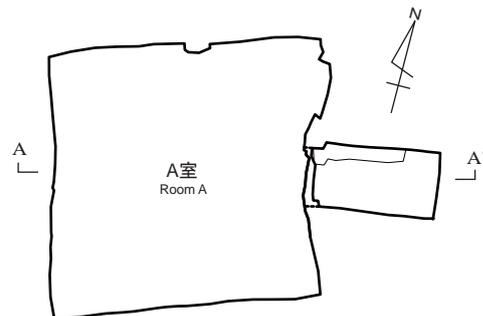
## 2. 調査成果の概要

### (1) シャフト84(図2)

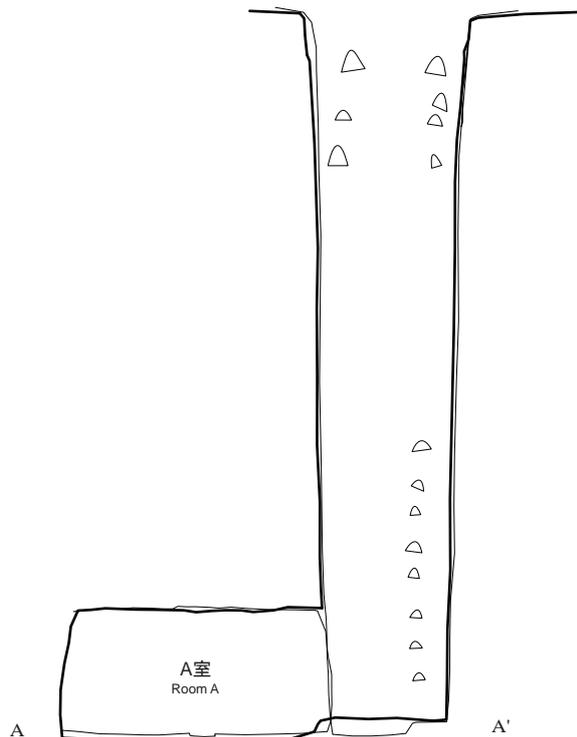
シャフト84はグリッド3E32から3E42にまたがっており、2007年の第13次調査で上部のみが発見されていた。シャフト開口部の長軸の方向は東西であり、平面の大きさは1.1 x 2.3 m、シャフト部の深さは10mであった。シャフト最下部から西側に部屋が発見された(A室)。A室の平面はほぼ方形で南北3.5m、東西が3.7m、床から天井までの高さが1.9mであった。

A室の中央部には南北方向に2体の人型木棺が並んで置かれており、どちらも頭部は北に向けられていた(写真1)。蓋や身部分の上部は失われていた。2体の木棺の内、東側にあったものは比較的残存状況が良好であり、全体が黒色で、頭部の頭巾の縞模様には青が使用されていることや、左肩にあたる部分には祠堂が赤色の線で描かれ、足の裏に当たる部分にもヌブ(*nwb*)の文字が赤色の線で描かれていた。西側にあった木棺は残存状況が悪く、身の底にあたる部分以外はほとんど残っていなかったが、身の内面に黒色の樹脂が塗られていたことを観察することができた。また、A室の南東部、南壁際のところにも、人型木棺が1体頭部を東に向けた状態で発見された(写真2)。残存状況が悪く、頭部はほぼ失われていたが、胸部にはハゲワシが翼を広げている図像を認めることができた。

シャフト部、A室の堆積の中には数多くの木棺片が含まれていた。木棺の顔部分は2体分復元することができた他、高浮彫で銘文や図像が表現さ



1 シャフト84底部平面  
1 Plan of Shaft 84



2 シャフト84A-A'断面  
2 Section A-A' of Shaft 84



図2 シャフト84平面・断面図  
Fig.2 Plan and section of Shaft 84



写真1 シャフト84A室木棺出土状況  
Photo 1 Wooden anthropoid coffins as found  
in the Room A of Shaft 84

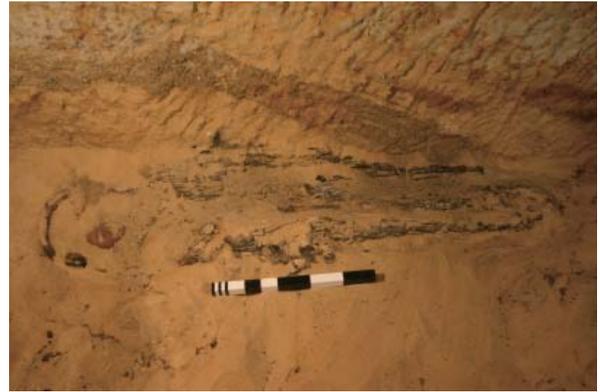


写真2 シャフト84A室木棺出土状況  
Photo 2 Wooden anthropoid coffin as found  
in the Room A of Shaft 84

れた断片が数多く発見された。木棺片以外にも、人型木棺の眼や眉の象嵌、金箔片、彩色モルタル、ファイアンス製指輪、土器片などが出土した。木棺や土器の類例から、このシャフト墓の利用開始はアメンヘテプ3世の治世まで遡る可能性があり、本遺跡でも特に古い部類に属する。

### 出土遺物

#### a) 人型木棺頭部片 (写真3、写真4)

写真3はシャフト部およびA室から発見された木棺片を接合したものであり、写真4はA室から発見された。両者に共通するのは目と眉が象嵌によって表現されており、唇がやや厚く、口角が上がっている。こ



写真3 シャフト84出土人型木棺顔部  
Photo 3 Face of wooden anthropoid coffin  
found from Shaft 84



写真4 シャフト84出土人型木棺顔部  
Photo 4 Face of wooden anthropoid coffin  
found from Shaft 84

うした口の表現はアメンヘテプ3世の治世に見られる特徴である (ex. Kozloff et al. 1992: 318-321, cat.62, cat.64)。

b) 象嵌 (図 3-1 ~ 5)

図 3-1 ~ 4 は人型木棺の眼に使用された象嵌の破片であり、シャフト部および A 室の堆積から出土した。図 3-5 はガラス製で眉の部分と考えられ、A 室から出土した。

c) ファイアンス製指輪 (図 3-6)

A 室の堆積から出土したもので、ターコイズ・ブルーのファイアンスで作られていた。

d) 土器 (図 4, 5)

シャフト部および A 室から発見された土器群で、大部分の断片は A 室から出土した。特徴的な器形としてはミニチュアの平底碗形で個体数も多く、口縁の内・外面に赤彩が施されているものがあった (図 4-1 ~ 22)。また、小型の平底鉢形 (図 4-23 ~ 35) も数多く出土しており、同様に口縁に赤彩があった。この2つの器形は完形に復元できたものが多い。尖底のアンフォラ (図 5-8, 9) で、細身で肩が丸みを帯び、胴部から底部にかけての外形の輪郭が直線のもの D. アストンによる分類の Type B1 に相当すると考えられ、特にアメンヘテプ2世~3世の治世に年代づけられているものと形状が類似している (Aston 2004a: 187-191, Fig.7-a), b) <sup>2)</sup>。

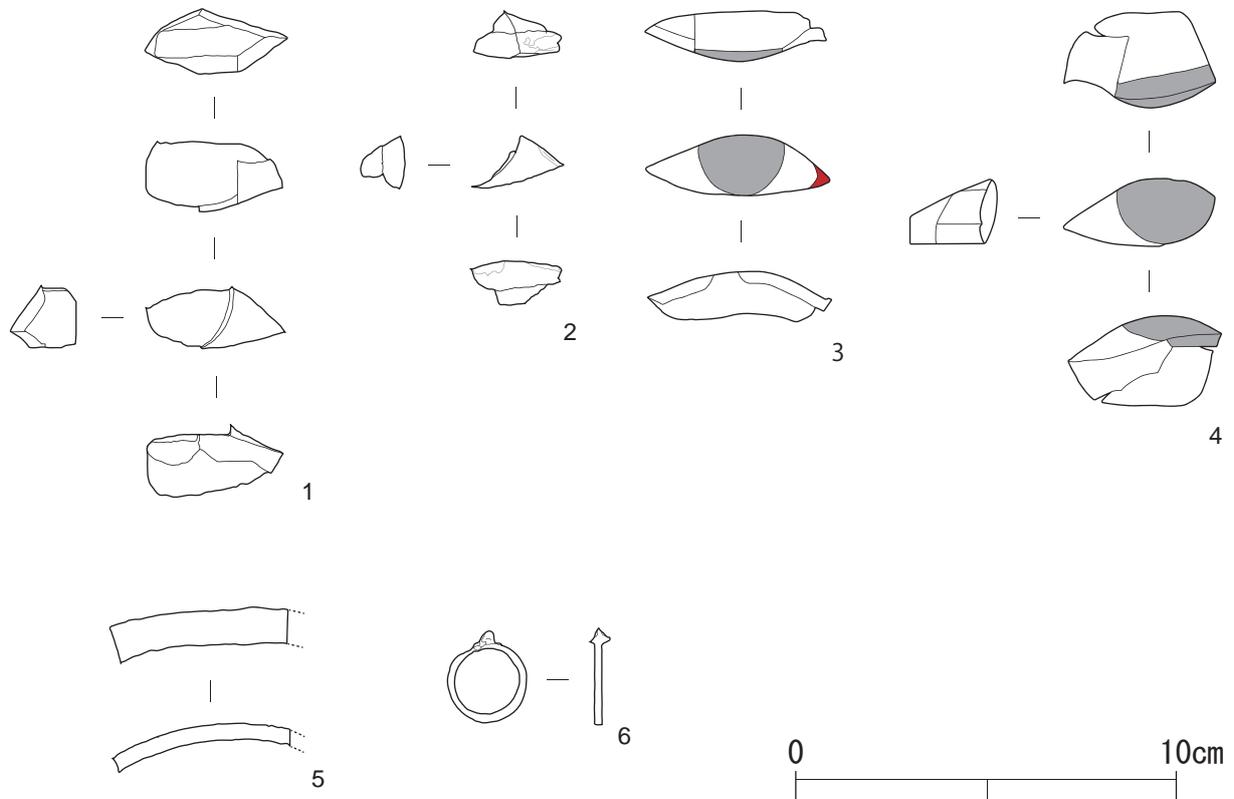


図3 シャフト84出土遺物  
Fig. 3 Objects from Shaft 84

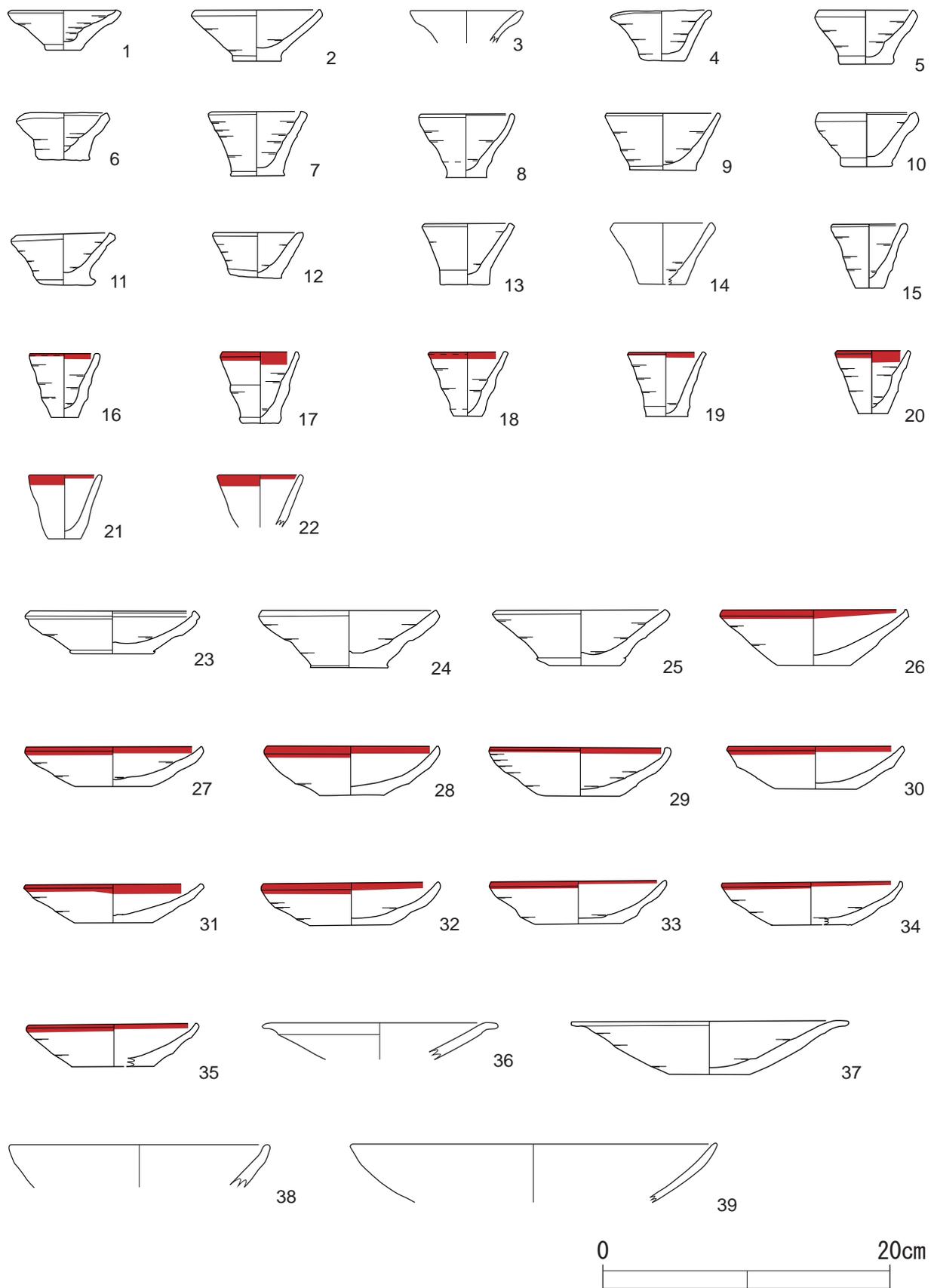


図4 シャフト 84 出土土器 (1)

Fig. 4 Pottery from Shaft 84 (1)



図5 シャフト84出土土器(2)

Fig. 5 Pottery from Shaft 84 (2)

## (2) シャフト 94 (図6)

シャフト 94 はグリッド 3E2 に位置しており、2008 年の第 14 次調査においてシャフト開口部が発見されていた。開口部の長軸方向は南北であり、平面の大きさは南北 2.1m、東西 0.8m、シャフト部の深さが 3.8m であった。シャフト最下部から南側に部屋が作られていた (A 室)。A 室の奥側にあたる南面は入口の幅よりもやや大きく、平面では末広がりになっている。A 室の東壁、西壁には幅の狭い棚状の段があり、床面より一段高くなっていた。A 室から中王国時代に特徴的な半球形の碗形土器が出土した。中には植物の種子と思われる粒が残存していた。シャフト部および A 室からはその他、ビーズ、木片、金箔片、土器片、骨などが出土した。土器の年代から、第 12 王朝末から第 13 王朝初期頃に埋葬が行われたと考えられる。

## 出土遺物

## a) 土器 (図7)

図 7-1 は A 室から出土した半球形の碗形土器であり、口縁部は内・外面に赤色スリップが塗布されている。ベッセル・インデックス (最大径 / 器高 x 100) は約 185 を示し、第 12 王朝末から第 13 王朝初期に年代づけられる (Arnold 1988: 140; Schiestl and Seiler 2012: 84-87, Group 3)。図 7-2 は同じく A 室から発見された広口の漏斗状の頸部、球状の胴部を有する壺形土器であり、センウセレト 3 世の治世から第 13 王朝にかけて類例が認められる (Schiestl and Seiler 2012: 400)。

## (3) シャフト 105 (図8)

シャフト 105 はグリッド 3E41 に位置しており、2008 年の第 16 次調査においてシャフト開口部が発見されていた。開口部の長軸方向は東西であり、平面の大きさは南北 1.3m、東西 2.3m で、深さが 7.7m であった。シャフト最下部から西側に部屋が発見された。シャフト床面は北、東、南それぞれの壁際が溝状に掘りこまれており、シャフト部をより深く掘り下げようとして止めた痕跡と考えられる<sup>3)</sup>。A 室への開口部はシャフト部よりもわずかに幅が狭くなるように、間口が作り出されていた。間口部分の床面には石灰岩ブロックが 2 点置かれており、A 室内部から石灰岩片が数多く発見されていることから、おそらく部屋の封鎖に使用されていたブロックの最下段にあたるものと推測される。A 室はやや南北に長い方形の平面を有しており、南北 3.6m、東西が

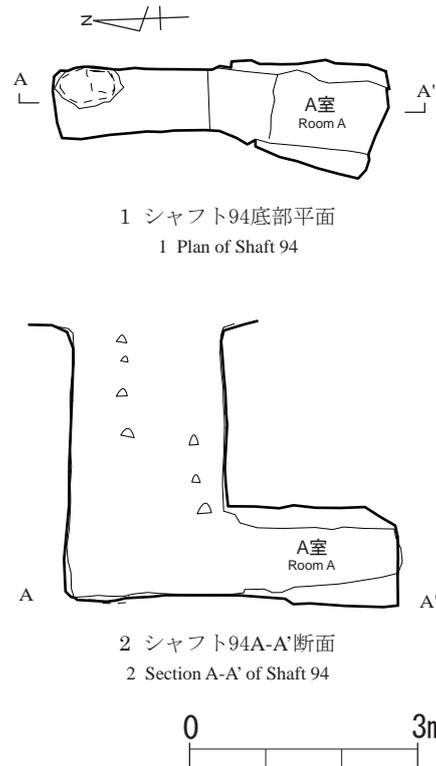


図6 シャフト 94 平面・断面図  
Fig.6 Plan and section of Shaft 94

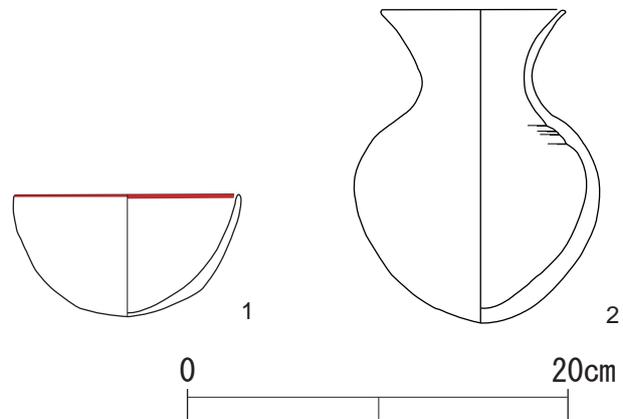


図7 シャフト 94 出土土器  
Fig. 7 Pottery from Shaft 94

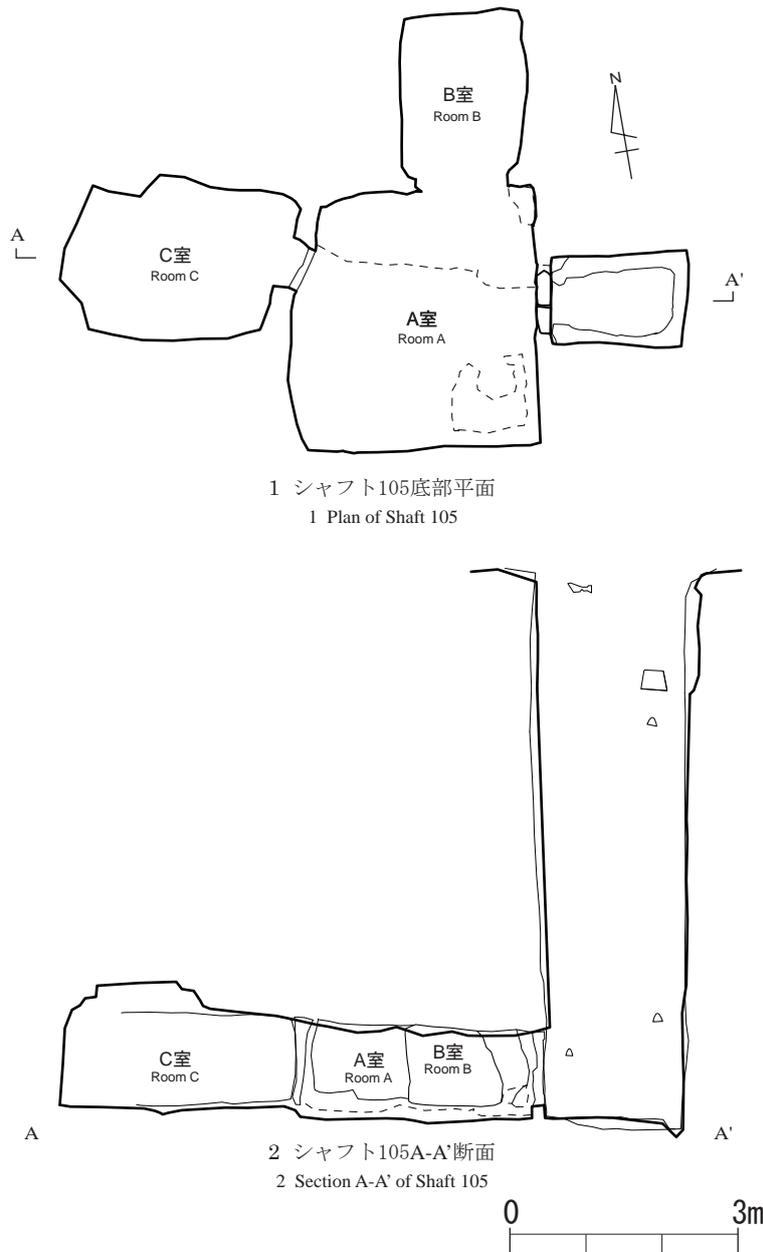


図8 シャフト 105 平面・断面図

Fig.8 Plan and section of Shaft 105

2.9m、床から天井までの高さは最高で1.3mであった。北側と西側にさらに部屋が掘削されており、それぞれB室、C室と名付けられた。A室の開口部の北端より北側は床面が1段高くなっており、B室、C室の床面はこの高くなった面とほぼ同じレベルから掘削されていた。B室は若干南北に長い長方形で、南北2.2m、東西1.6m、床から天井までの高さは1.3mであり、入口部分は平面の幅がわずかに狭くなっていた。C室は南北1.4m、東西2.9mであり、天井は西側が一段高くなっていた。床から天井までは最も高い部分で1.8mである。B室、C室とも開口部にはピンク色のモルタルが残存していることから、埋葬が行われた時にはA室の開口部と同様にB室、C室も封鎖されていたと推測される。

シャフト105からは、木棺は断片しか発見されなかったが、アミュレットやビーズをはじめ、象嵌、シャブティ、石製容器、陶製カノポス壺、大型のアンフォラを含む土器群など、豊富な量の遺物が出土した。木棺お

よび土器から得られた情報を総合すると、シャフト 105 は第 19 王朝のラメセス 2 世治世以降に埋葬が行われていたと考えられる。

### 出土遺物

#### a) 木棺片 (図 9-1、2)

図 9-1 は A 室から出土した断片で、人型木棺の蓋の足に当たる部分と考えられる。黒色の樹脂が外面に塗布され、表面に黄色で図像が描かれていたと思われるが、表面の樹脂の大部分は剥がれ落ちていた。図 9-2 は「イシスの結び目」のシンボルであり、人型木棺の手に握られていたと考えられる。同様に「イシスの結び目」の

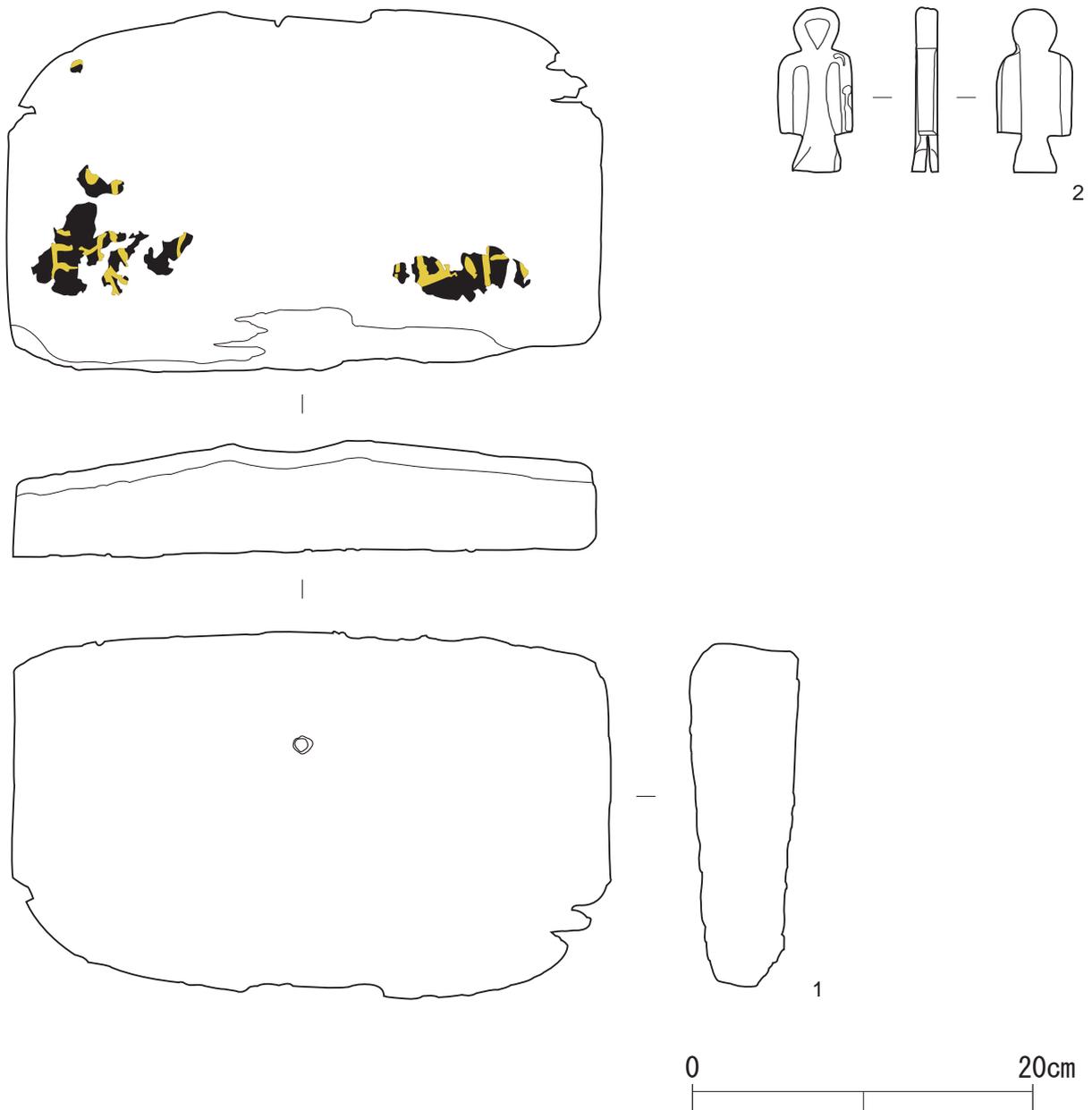


図9 シャフト 105 出土遺物 (1)

Fig. 9 Objects from Shaft 105 (1)

シンボルを持っている例はデイル・アル＝メディーナのセンネジェム墓（TT1）から出土した第19王朝のコンスの人型木棺が挙げられる（Fried 1987: 192-193, cat.60）。人型木棺の手の部分に穴を空け、木製のアミュレットを挿入するのは、第19王朝から第22王朝初めにかけて見られる特徴である（Raven 1991: 20）。

b) 石製容器（図10-1）

全体ではエジプシャン・アラバスター製の長頸の台付双耳壺の形状であるが、3つの部分に分かれていた。中間の肩にあたる部分には褐色の彩色が見られた。断片はシャフト部、A室、B室、C室にまたがって発見された。分割はされていないが、同様の器形のものは、トトメス3世の治世から第20王朝にかけて類例が認められる（Aston 1994: 152）。

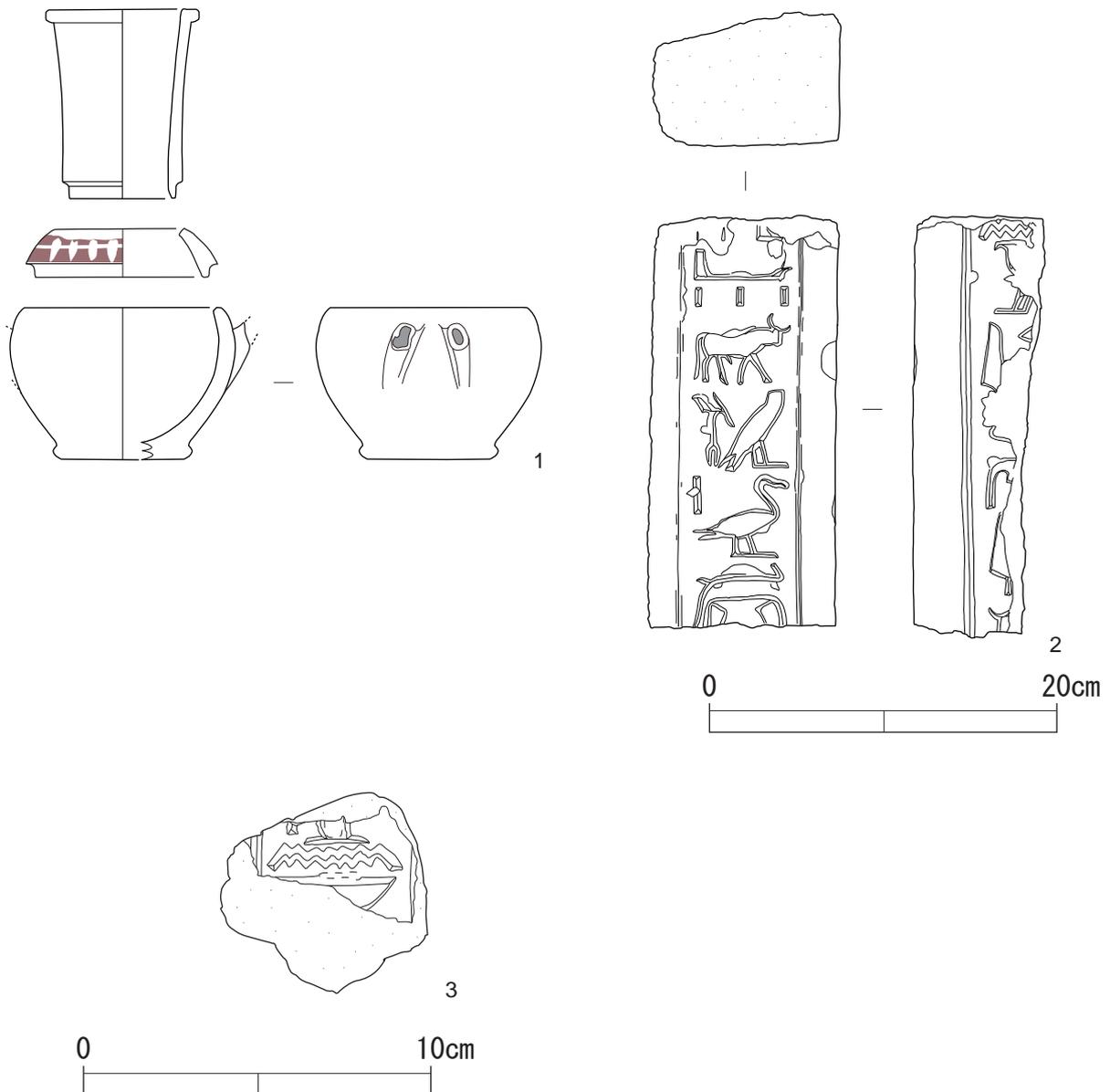


図10 シャフト105出土遺物(2)  
Fig. 10 Objects from Shaft 105 (2)

## c) 石灰岩製建材（ドア・ジャム）（図10-2）

いわゆるドア・ジャムと呼ばれる石灰岩製の建材の破片であり、隣り合う2つの面に縦方向に銘文が陰刻で彫られていた。図10-2の左側の部分は次のように書かれていた。

/// K3-m-w3st, s3 imy-r nwb ///

「…カエムワセト、…の監督官の息子…」

## d) 石灰岩レリーフ片（図10-3）

シャフト部のA室開口部前の堆積から発見された石灰岩製のレリーフの断片であり、陰刻によって文字が刻まれていた。

## e) シャブティ（図11）

図11-1～5は青色ファイアンス製のシャブティであり、図11-1、2はシャフト部から、それ以外の図11-3～5はA室から発見された。図11-1は胸部から足部上部にかけての断片であり、銘文には、

*shd 3sir šm\*(yt)///*

「セヘジュ、オシリス、…の歌い手…」

と書かれていた。図11-3はA室から発見されたもので、これまで「タ」のトゥーム・チャペル周辺から発見されたファイアンス製シャブティの中では小柄である。黒色で鬘、眼と眉、両手、銘文帯の枠、背面の籠などが表現されている。銘文は認められなかった。図11-4、5については類似する例が「タ」のトゥーム・チャペル周辺から数多く出土している（吉村、近藤他2005: 117, 写真6; 吉村、馬場他2009: 12, 図8.1, 写真5; 吉村、近藤他2011: 74-78, Fig.46, 47, Pl.17; 吉村、矢澤他2012: 50-53, 図23-1, 61, 図29-1）。サッカラ地区の類例ではマヤとメリトの墓（Raven 2001: 37, Pl.19, cat.134, 135a, b, 136）、イウルウデフ墓（Raven 1991: 41-42, Pl.41, cat.49-52）で発見されており、第19王朝に年代付けられている。

図11-6は木製シャブティの顔部分と思われる断片であり、A室から出土した。鬘部分は青色に彩色されていた。

## f) アミュレット（図12）

図12-1～5はウジャトの眼であり、様々な材質によって作られていた。図12-1はC室から出土しており、カーネリアン製と考えられる。図12-2はC室から出土しており、やや光沢のある白色を呈し、部分的に薄く青色が発色している箇所があり、ガラス製と考えられる。図12-3はC室から出土しており、光沢のある青色のガラス製である。図12-4はA室から出土したもので、白色を呈しており、同じくガラス製と考えられる。図12-5はシャフト部から出土したファイアンス製のものであり、ビーズとして使用された可能性もある。どの個体も平坦な面を持ち、横方向に穿孔があるのが特徴である。

図12-6はアピス牛を象ったガラス製のアミュレットで、全体が黒色だが白色の斑文が表現されている。図12-7はファイアンス製で、パピルス杖（ワジュ）を象ったものと考えられる。図12-8はファイアンス製で、欠損しているが、跪き手を顔の前に掲げた嘆きのポーズをとっている姿を現していたと考えられる。嘆きのポーズをとったイシスやネフティスのアミュレットは死者を保護するものとして、しばしば2つそろって使用されたが（Andrews 1994: 48）、本例では1点のみしか発見されておらず、頭頂のシンボルがあった部分が欠損しているため、どちらの女神を象ったものなのかは不明である。平坦な背面には接着のためのモルタルが一部残存



図11 シャフト105出土遺物(3)

Fig. 11 Objects from Shaft 105 (3)

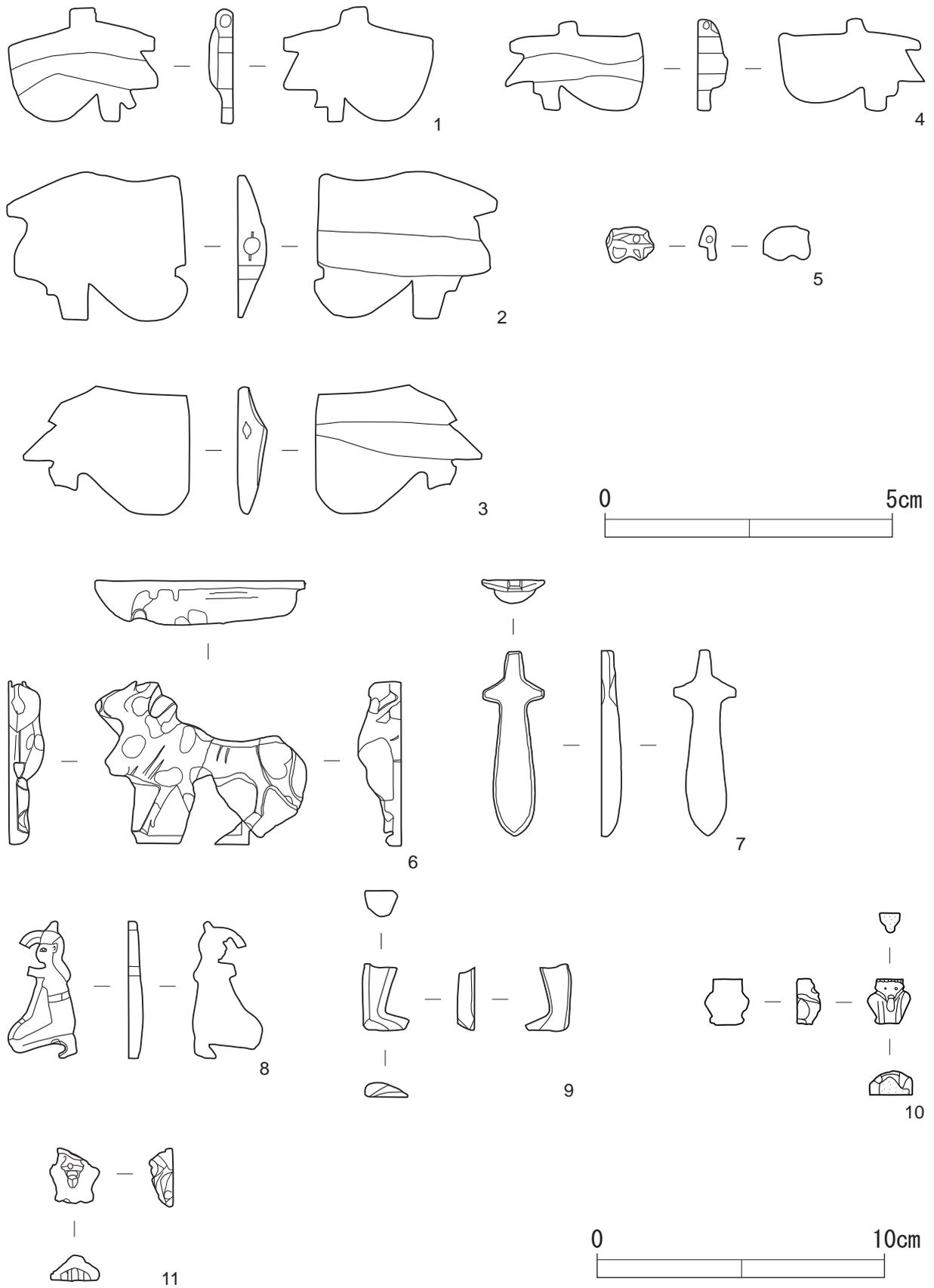


図12 シャフト105出土遺物(4)

Fig. 12 Objects from Shaft 105 (4)

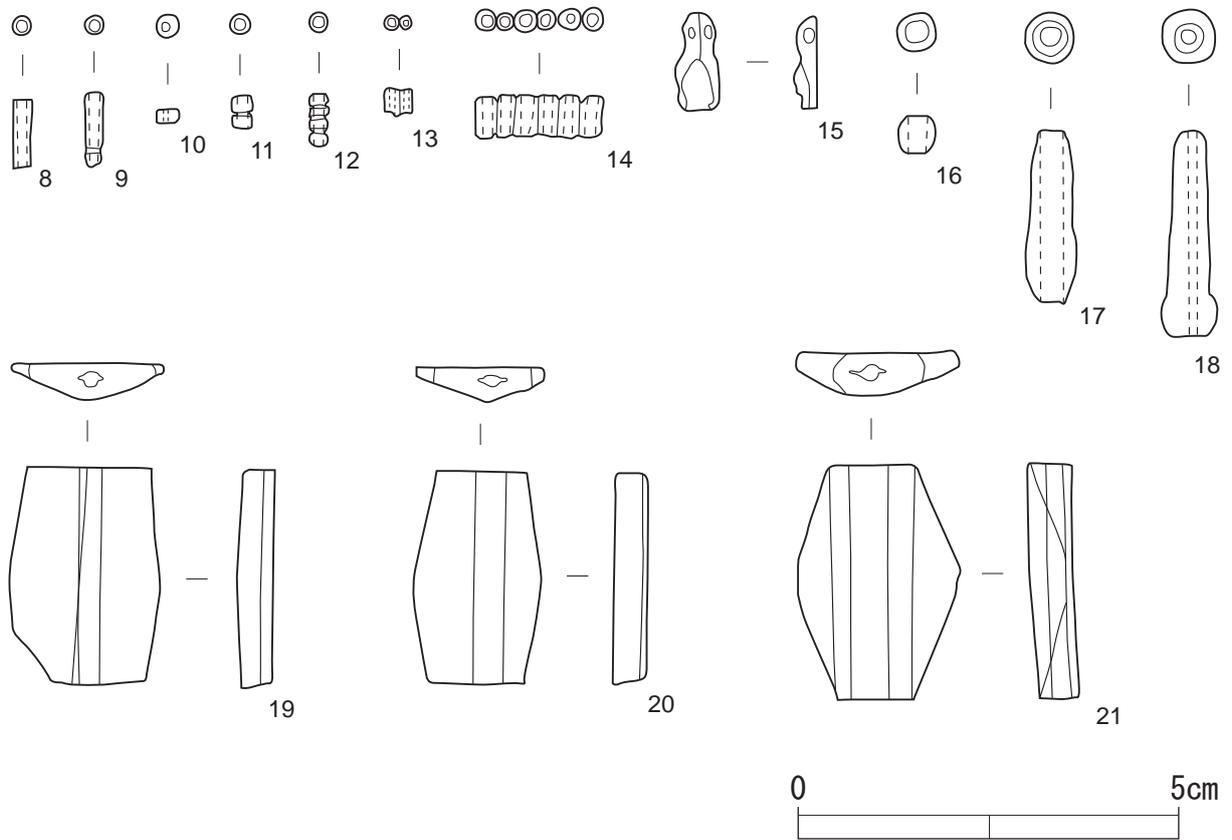
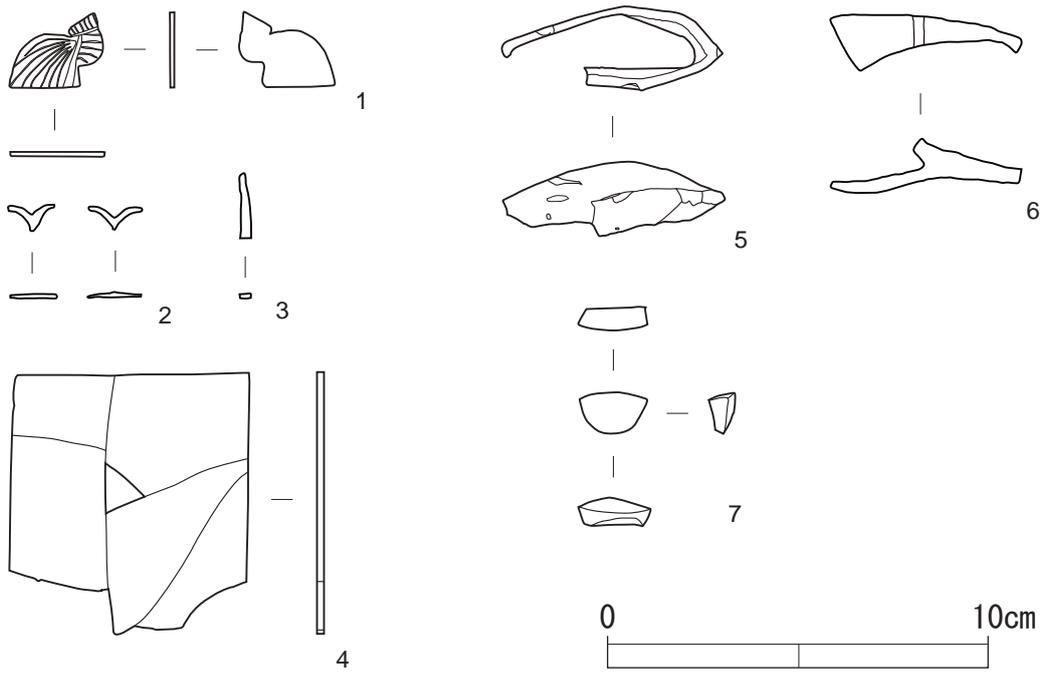
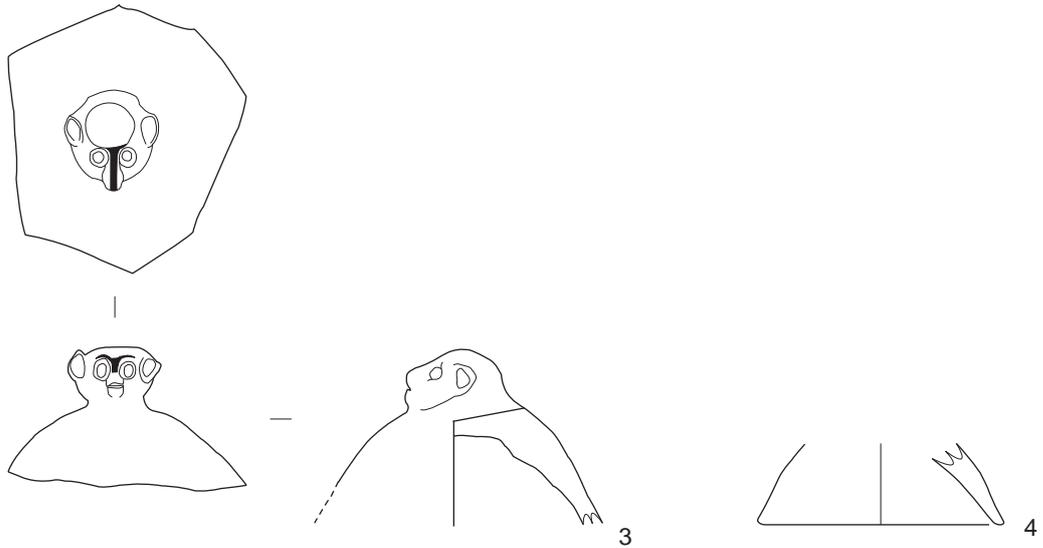
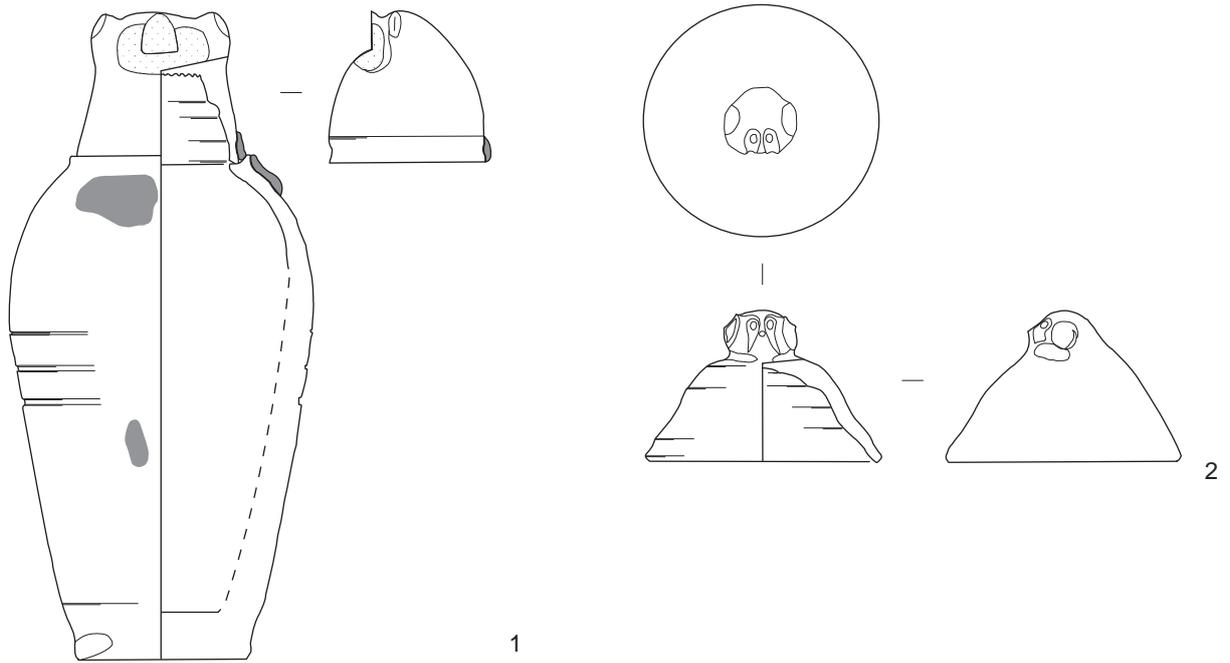


図13 シャフト105 出土遺物 (5)

Fig. 13 Objects from Shaft 105 (5)



 欠損部  
 モルタル付着部

0 20cm



図14 シャフト105 出土遺物 (6)  
 Fig. 14 Objects from Shaft 105 (6)

していた。図 12-9 は青色ガラス製で、神もしくは人物を象ったものの足部断片と思われる。図 12-10、11 は青色ガラス製で、バス神を表現していたと考えられる。

g) 象嵌 (図 13-1 ~ 7)

図 13-1 は白色で人物のキルトを表現したものであり、図 13-2 は白色で、図 13-3 は白みがかった青色、図 13-4 は青色で、どれも極めて薄く、何らかの副葬品にはめ込まれていたと考えられる。どれも A 室で発見された。

図 13-5 ~ 7 は人型木棺の眼に使用されていた象嵌の断片と考えられる。図 13-5 は青色のガラス製の眼の枠であり、B 室と C 室から出土した個体が接合した。図 13-6 は同じくガラス製の眼の枠で、A 室から出土した。図 13-7 は A 室から出土したもので黒色であり、虹彩に当たる部分に使用されていたと考えられる断片である。

h) ビーズ (図 13-8 ~ 21)

シャフト 105 からはビーズが数多く出土しており、図に示してあるのは発見されたビーズの代表的な形である。ファイアンス製とガラス製のものがあり、多くがシャフト部で発見された。

i) 陶製カノポス壺 (図 14、15)

図 14-1 の蓋は A 室から出土しており、容器部分はシャフト部および A 室から発見された断片から復元された。蓋は欠損によって全容が不明だが、2つの突起は耳を表しているように見えることから、ジャッカルの頭部で

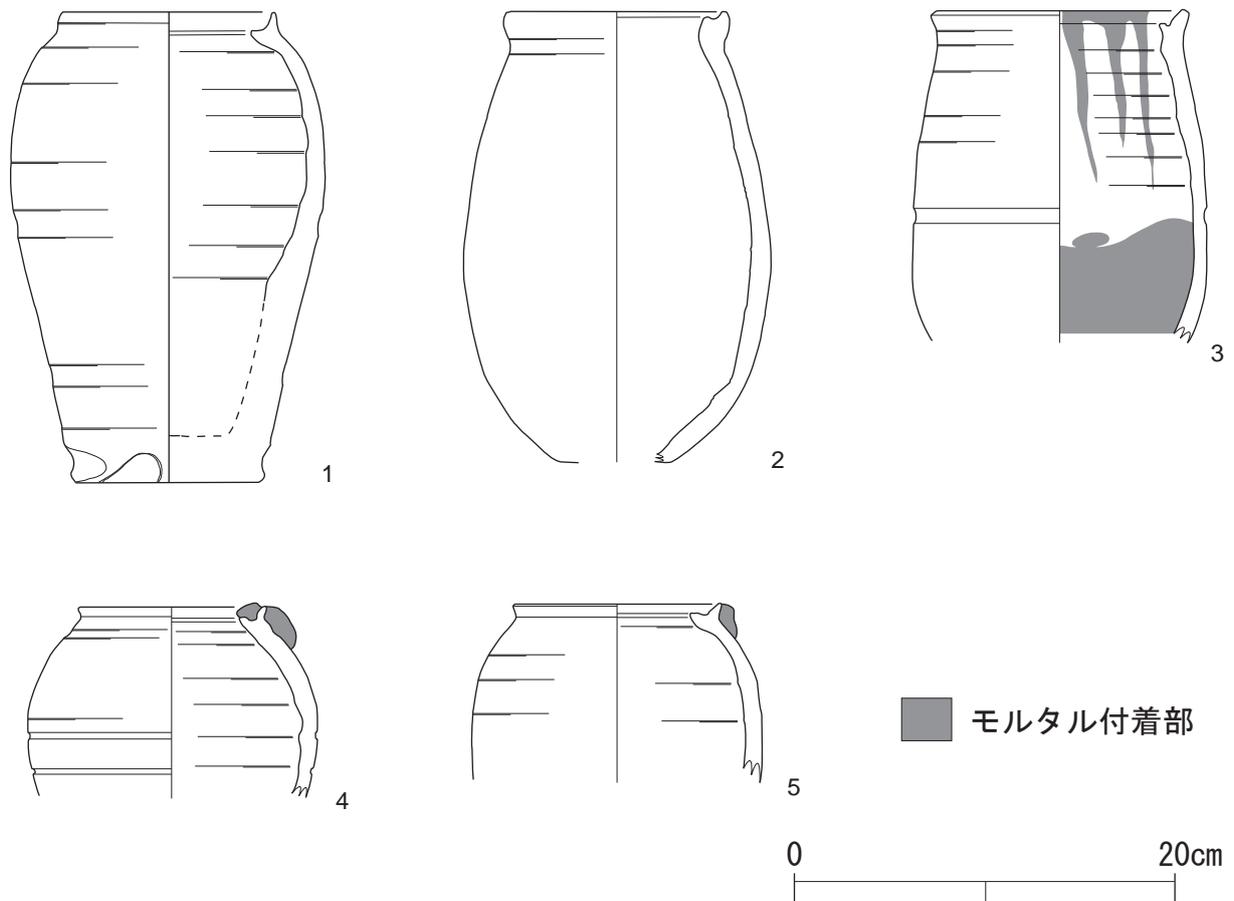


図 15 シャフト 105 出土遺物 (7)

Fig. 15 Objects from Shaft 105 (7)

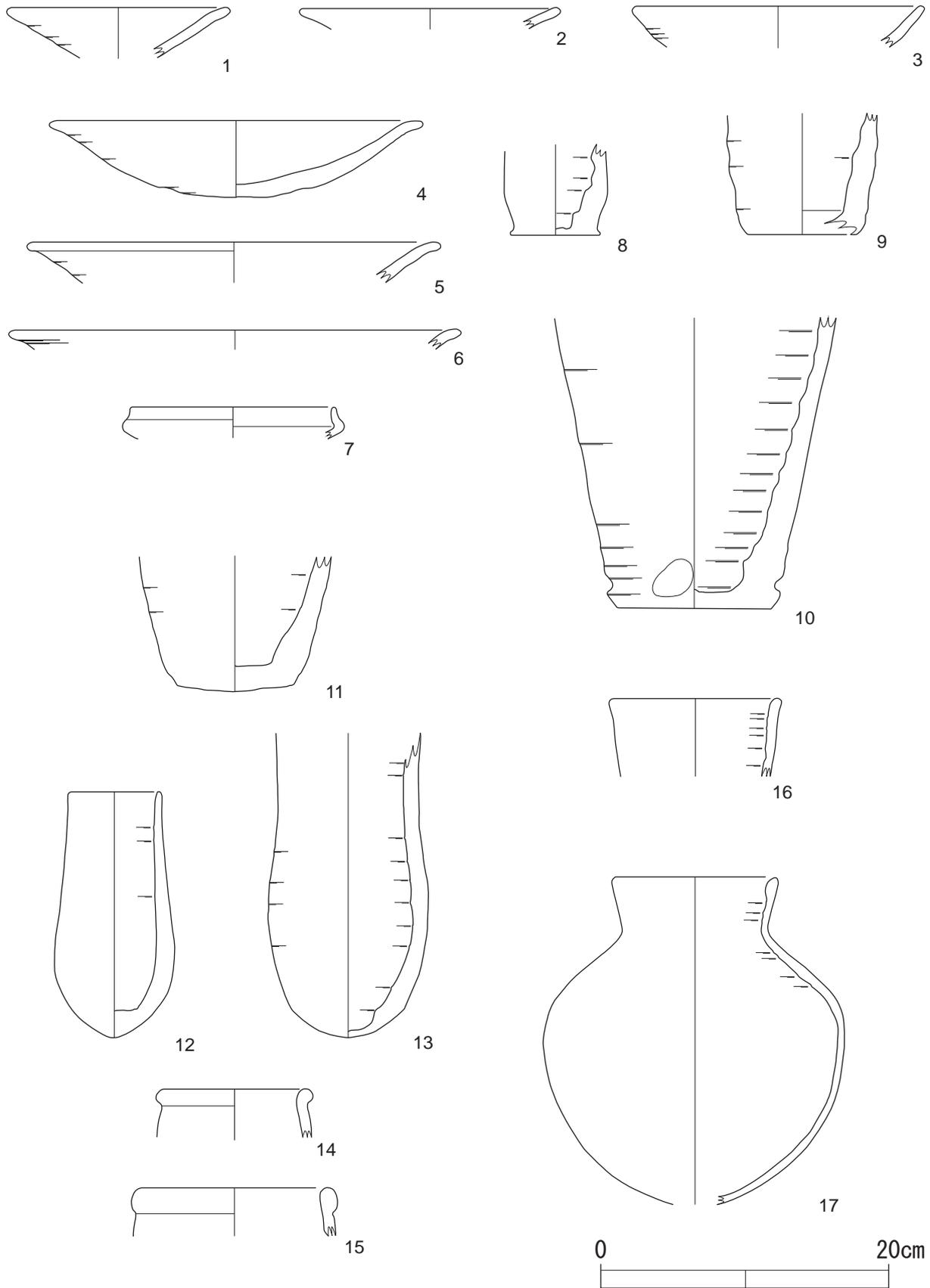


図16 シャフト105 出土遺物 (8)

Fig. 16 Objects from Shaft 105 (8)

あり、ドゥームテフ神に該当するものと推測される。図14-2はA室から出土した蓋部で、頂部にハヤブサの頭部が象られており、ケベフセヌエフ神に該当すると考えられる。図14-3はシャフト部から発見された蓋部の断片で、頂部にヒヒの頭が表現されており、ハピ神に該当すると考えられる。容器部分は口縁部に蓋受けが作り出されており、蓋と容器を固定するためのモルタルが付着していた。容器部分は少なくとも6個体分発見されていることから、陶製カノボス壺は少なくとも2人の人物のために準備されたと考えられる。

#### j) 土器 (図16～18)

特徴的な土器としては、図17-5はギリシア系の巡礼壺の断片と考えられるものであり、褐色の線による紋様が複数同心円状に塗られていた。同じ形状・紋様のもので、エジプトで発見された例としては、セドメント、グラーブから出土したものが挙げられる (Petrie and Brunton 1924: Pl.LX.25; Brunton and Engelbach 1927: XXXIX.472)。図17-6は緑色の釉葉が塗布された陶製のランプであり、イスラム時代のもと考えられる。口の部分は使用による焼成痕があり、盗掘時に持ち込まれたものと推測される。

図18-1～3のアンフォラは胎土が Marl D<sup>4)</sup> に分類されるもので、器形はD.アストンによる分類の Type B2 に類似しており、ラメセス2世の治世からセトナクトもしくはラメセス3世に年代づけられている (Aston 2004a: 191-193, Fig.8-a)。図18-4は胎土が Nile B2 であり、同じくD.アストンによる分類の Type G に該当する。Type G のアンフォラは数が少ないが、ラメセス2世治世の類例がある (Aston 2004a: 200-201, Fig.16-b))。

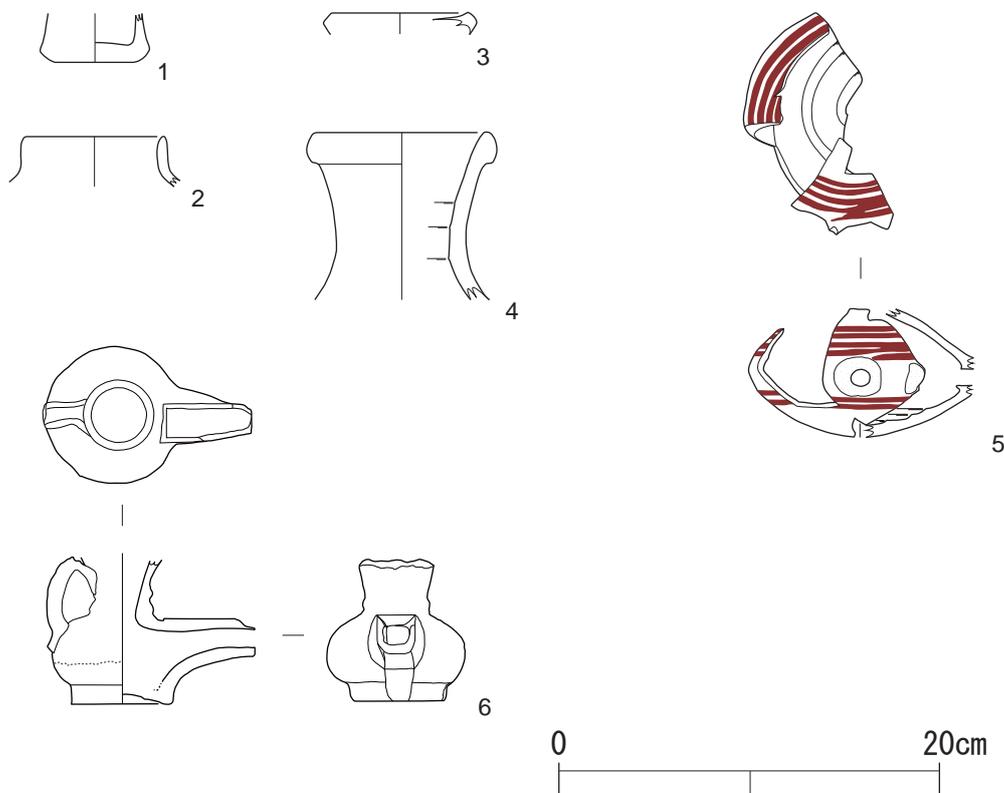


図17 シャフト105出土遺物(9)

Fig. 17 Objects from Shaft 105 (9)

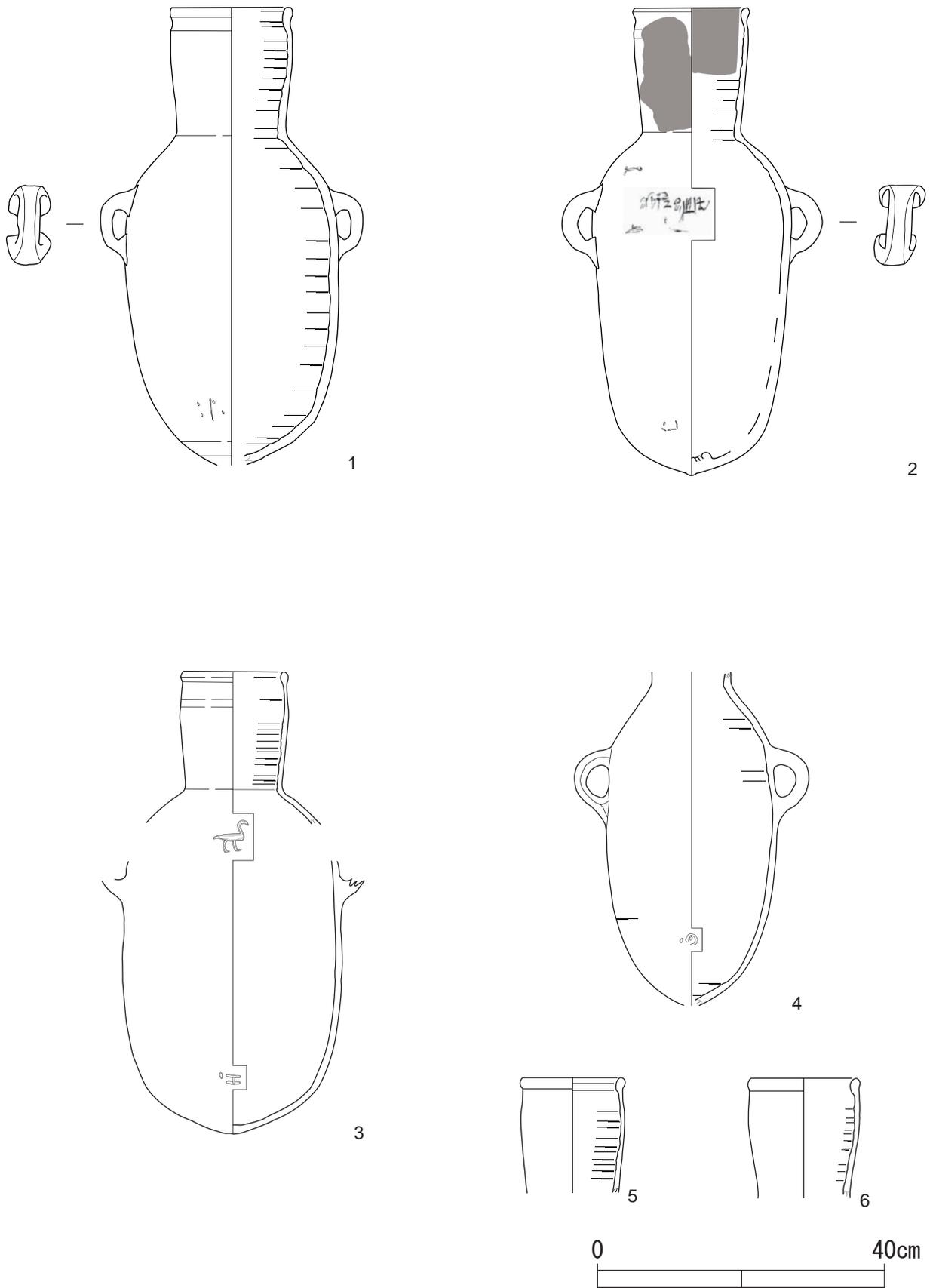


図18 シャフト105出土遺物(10)  
 Fig. 18 Objects from Shaft 105 (10)

## (4) シャフト 106 (図 19、写真 5)

シャフト 106 はグリッド 3E41 に位置しており、2008 年の第 16 次調査においてシャフト開口部が発見されていた。開口部の長軸の方向は南北であり、平面での大きさは南北 2.3m、東西 1.0m で、深さが 5.8m であった。シャフト開口部西側の地上には、長さ 60cm、幅 40cm、厚さ 20cm の石灰岩ブロックが開口部に沿う形で置かれており、その周囲にはタフラが堆積していた (写真 5)。シャフト最下部から南側に部屋が発見された (A 室)。シャフト部の堆積から、祠堂もしくは家屋形の模型の一部と考えられる木製の扉が 1 点出土した。シャフト部 A 室開口部前の堆積からは、石灰岩製のステラ型祠堂 (Stelenkapelle) が発見された。また、同じレベルから石灰岩製のカノポス壺の蓋と、容器の断片が出土した。A 室は南北 2.3m、東西が 0.9m、床から天井までの高さが 1.4m であり、盗掘によって攪乱されていた。人骨の他に石製カノポス壺やファイアンス製のカエル形小像、ファイアンス製の疑似供物などが発見された。土器、ファイアンス製ビーズはシャフト部と A 室の堆積から出土した。木製模型は、中王国時代の初期の埋葬に多く見られるが<sup>5)</sup>、シャフト部から発見されているため、混入ということもあり得る。ステラ型祠堂の存在や、土器の年代は第 13 王朝初期を示している。

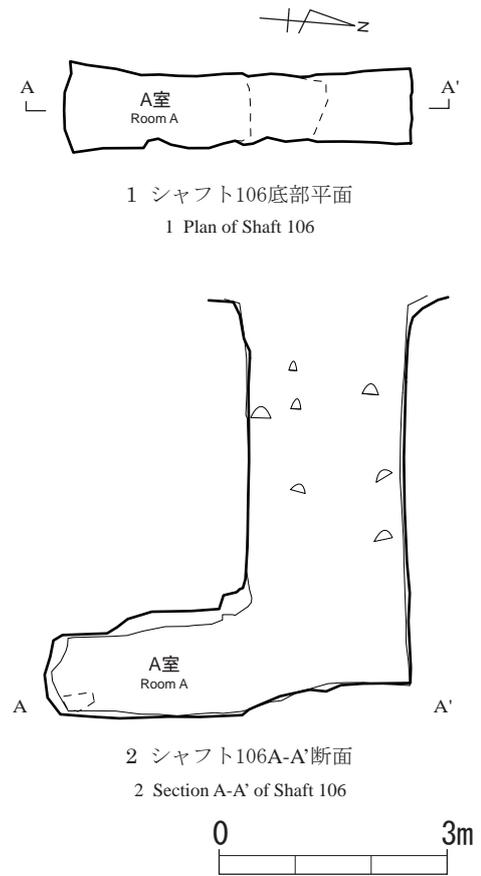


図 19 シャフト 106 平面・断面図  
Fig.19 Plan and section of Shaft 106



写真 5 シャフト 106 地上部  
Photo 5 Shaft 106, around the entrance on the ground

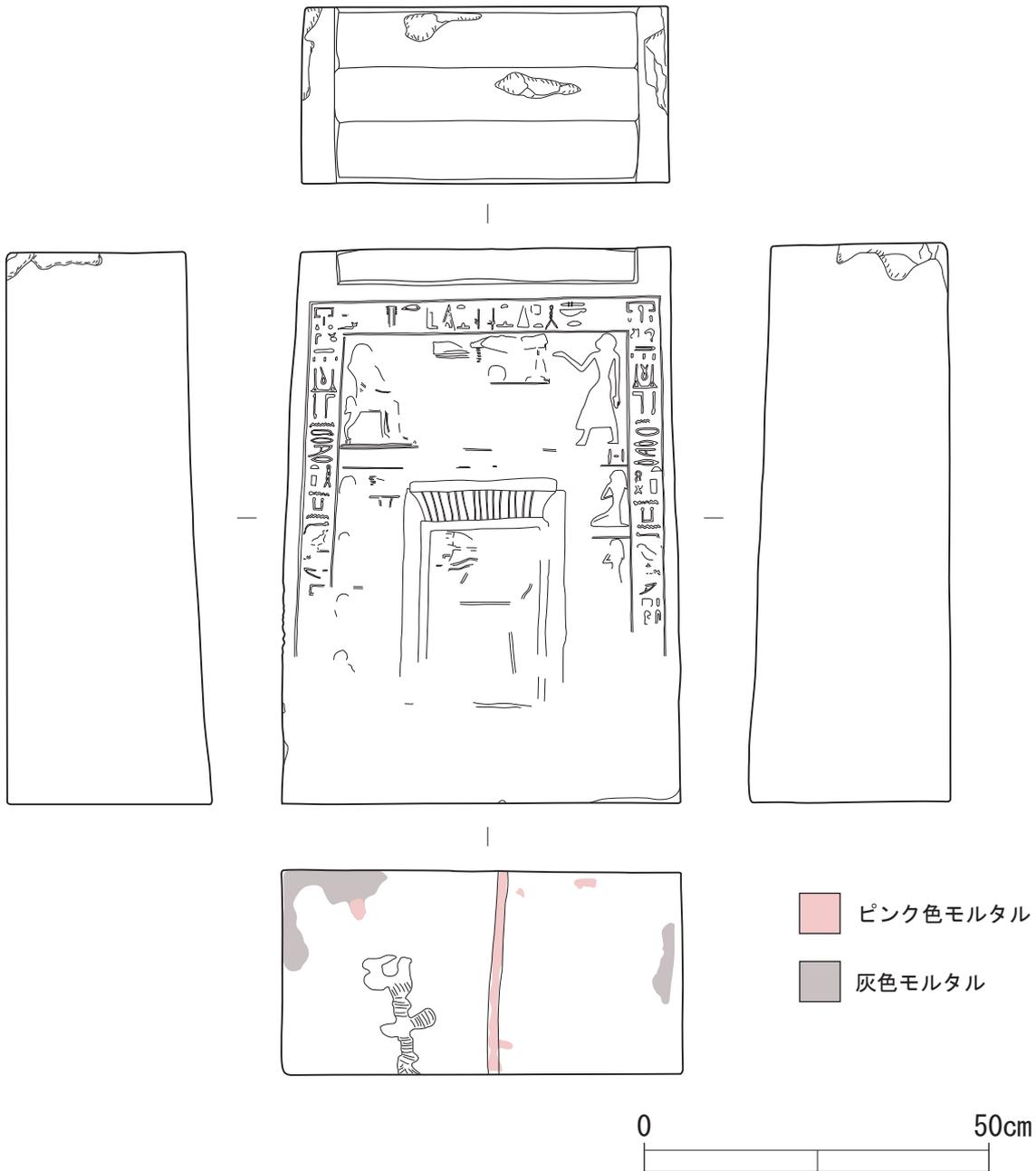


図20 シャフト106出土遺物(1)

Fig. 20 Objects from Shaft 106 (1)

### 出土遺物

#### a) 石灰岩製ステラ型祠堂(図20)

シャフト部の堆積から発見されたもので、高さ82cm、幅58.5cm、厚さ29cm、正面および側面はわずかに勾配がある。頂部中央はヴォールト形の屋根が3つ並ぶ形状になっている。底面は中央に短軸の方向に細い溝があり、内部にはピンク色のモルタルが詰まっていた。それ以外の部分にも灰色のモルタルとピンク色のモルタルがところどころにみられた。正面は上部横方向および左右端の縦方向に銘文帯が配され、定型の供養文が刻まれていた。銘文帯の内部は、中央に軒蛇腹を持つ祠堂が陽刻によって描かれ、同じく陽刻のトラスによって区切られた部分の内部にも何らかの図像が描かれていた痕跡が見られるが、摩耗のため不鮮明

である。祠堂の上には椅子に座って右側を向いた人物が左上に描かれ、その前には供物があり、右側には供物を捧げている人物が左向きに立った姿で描かれている。また祠堂の両脇には少なくとも4段に渡って人物が描かれているのが見受けられ、一番右上のものは中央に向かって跪いた女性であることがわかる。その前にも図像が描かれていた様子だが、摩耗のため内容は不明である。文字は陰刻、図像は沈み浮彫りによって表現されていた。

銘文は上部中央を起点として左右2つに分けられ、向かって右側の内容は、

*hṭp di nswt pth skr di=fprt-hrw t hṅqt k3 3pdw šs mnḥt snṯr mrḥt n k3 n imy-r ///*

「王が与える供物、プタハ・ソカル神がパン、ビール、牛、鳥、アラバスター、衣服、香、油からなる言葉による供物を…の監督官…のカーに与えんことを」

向かって左側の内容は、

*hṭp di nswt 3sir nb 3bdw di=fprt-hrw t hṅqt k3 3pdw šs mnḥt snṯr mrḥt n k3 n imy-r ///*

「王が与える供物、アピュドスの主、オシリス神がパン、ビール、牛、鳥、アラバスター、衣服、香、油からなる言葉による供物を…の監督官…のカーに与えんことを」

となっている。

このような遺物はG.ラップによって「ステラ型祠堂(Stelenkapelle)」と呼ばれている。に類似する例として、ボン大学エジプト博物館に収蔵されているものがある。この場合、頂部はいわゆるペルヌウ型であり、下半分はパレス・ファサードの装飾が周囲に巡っており、側面のファサード装飾の上にはミイラの姿をした男性の像が軒蛇腹とトラスによって囲まれた壁龕の中に配されているという点は本例と異なるが、正面に上部横方向および左右端の縦方向に銘文帯が配され、その中に軒蛇腹とトラスの浮き彫りによって区切られたスペースがある、と言う点ではよく似ている。G.ラップの研究によれば祠堂は第13王朝に年代づけられており、出土地は不明だがおそらくアピュドスだろうとされている(Lapp 1994)。

シャフト106の地上部には石灰岩ブロックがシャフト開口部に平行して置かれており、ステラ型祠堂とともに地上の構造物を形成していた可能性がある。

#### b) 石灰岩製カノポス壺 (図21)

石灰岩製カノポス壺の蓋が3点、容器が2点発見された。図21-1の蓋と図21-5の容器の断片はシャフト部から発見され、それ以外はA室から発見された。蓋部は人の頭部を象っており、髪は青色に塗られていたようで、顔料が一部残存している。眼の縁や眉は黒色で書かれ、虹彩は赤色で中央に黒色の点が見られる。図21-3のみ黒色の髪が表現されていた。容器の胴部には縦方向に銘文が陰刻で掘られており、図21-5にはさらに黒色の顔料で文字が塗られていた。図21-4はイムセティであり、図21-5はドゥアムテフ、被葬者の名前は「キイ(ky)」(Ranke 1935: 343)であることが分かる。中王国時代のカノポス壺の容器部分に碑文が刻まれるようになるのは、第12王朝中期以降とされている(Bourriau 1988: 96)。

#### c) 木製扉 (図22-1)

軸を持つ形状から祠堂もしくは家屋形の木製模型の扉と推測される。表面には図像が認められ、杖を持った人物が左側を向いて立ち、肌は赤色で、髪は黒色で表現され、顔の正面にはロータスが描かれていた。杖を持った人物と向かい合うようにして、別の人物が立った姿で表現されていた。

2007年の第13次調査において、シャフト106のすぐ南西に位置するグリッド2E40cの地上のタブラ層から、木製の家屋模型が出土していた(吉村、馬場 2010: 36, 図40, 41)。この模型は発見時半分しか残って

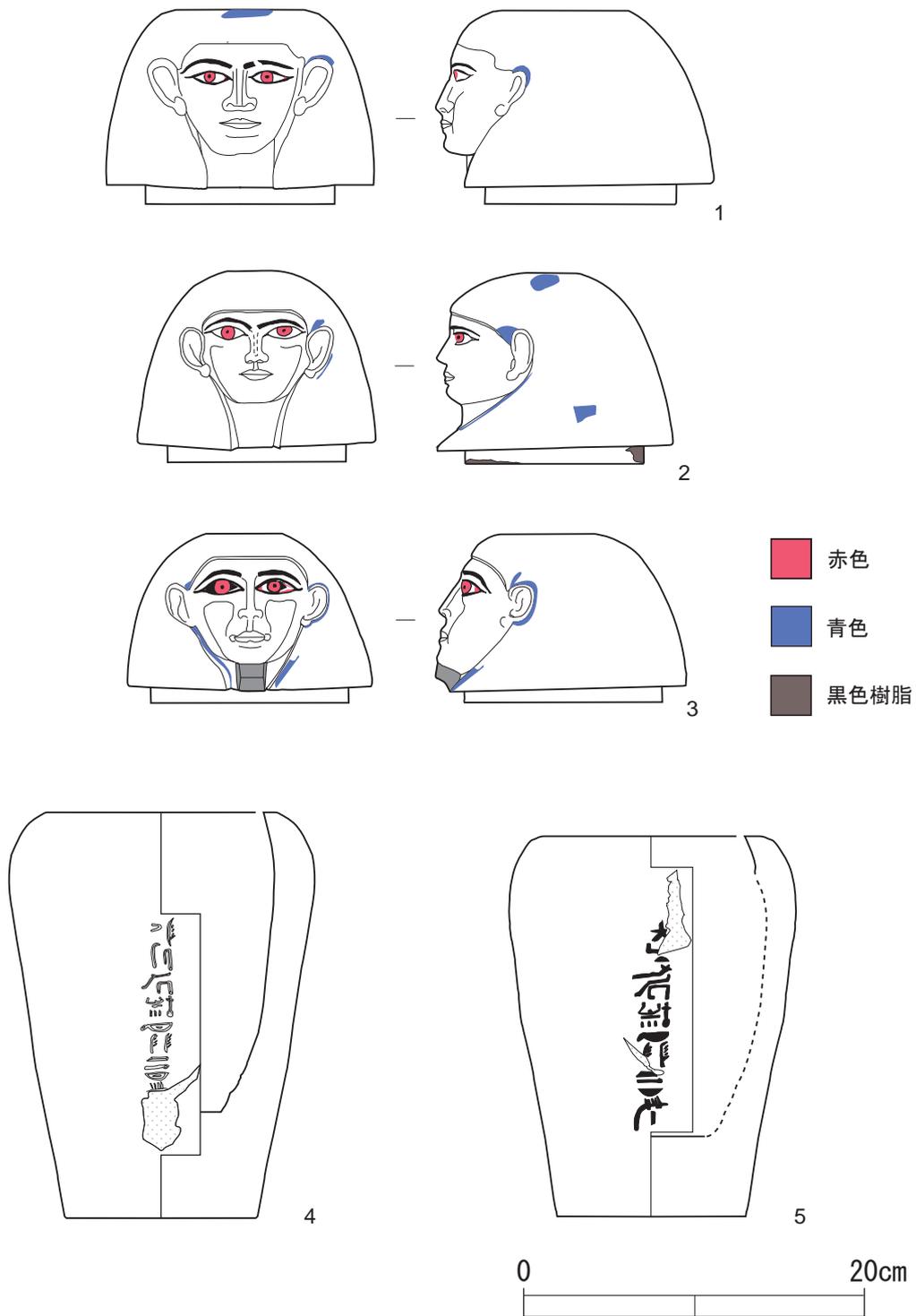


図21 シャフト106出土遺物(2)

Fig. 21 Objects from Shaft 106 (2)

いなかったが、側面の壁にあたる部材の表面には同様に杖を持った人物が描かれており、大きさも同程度であることから、この模型とシャフト106出土模型が同一個体に属する可能性がある。

#### d) ファイアンス製カエル型小像(図22-2)

カエルを写實的に表現したファイアンス製小像であり、A室から発見された。底には5mmほどの穴が開

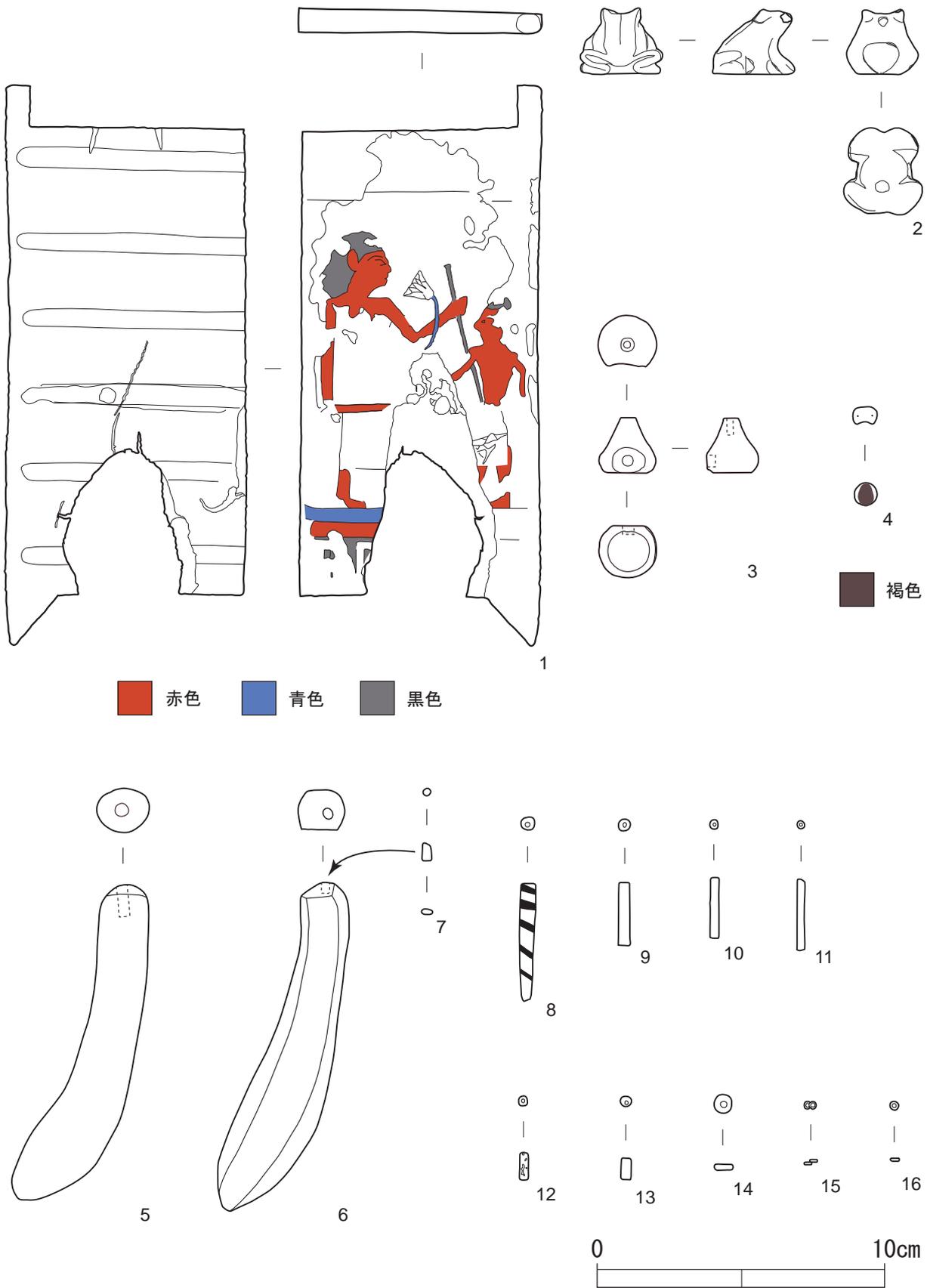


図22 シャフト106出土遺物(3)

Fig. 22 Objects from Shaft 106 (3)

いており、おそらく焼成時に像を固定するために使用されたものと思われる。ファイアンスのカエル型小像はリシュト、ハラガからも出土した例がある (Arnold 1992: 62, cat.54; Engelbach 1923: Pl.XIV.353)。

e) ファイアンス製擬似供物 (図 22-3 ~ 7)

食用の植物を表現したファイアンス製品と考えられる。図 22-3 は山形で頂部と裾部に穴が開いている。全体は褐色だが、裾の穿孔部分の周囲のみ黒色になっている。この形状はイチジクを表現しているとされている (cf. Arnold 1992: 79, cat.243)。図 22-4 は白色で穀物の一種を表現している (cf. Arnold 1992: 79,

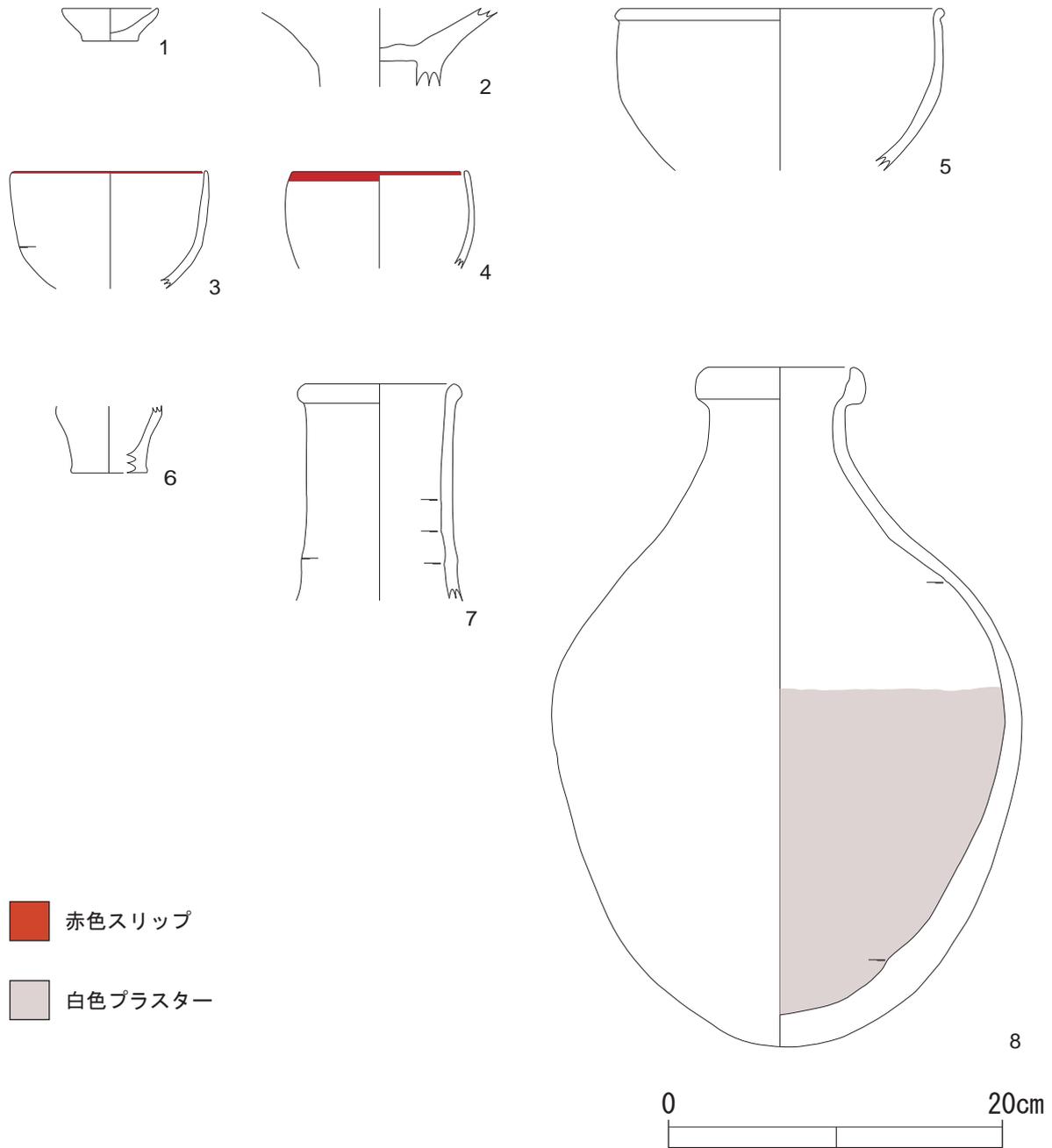


図 23 シャフト 106 出土遺物 (4)

Fig. 23 Objects from Shaft 106 (4)

cat.245)。図 22-5 は青緑色、図 22-6 は白色であり、両方とも先端に穿孔がある。キュウリを表現したものと考えられている (cf. Arnold 1992: 79, cat.241)。図 22-7 は図 22-6 の穿孔部分に入れられていた。これらの供物は第 12 王朝後期から第 13 王朝に年代づけられている (Friedman 1998: 239)。

#### f) ファイアンス製ビーズ (図 22-8 ~ 16)

図 22-8 ~ 16 はシャフト部および A 室から発見されたファイアンス製ビーズの代表的な形状の一覧である。特徴的なものは図 22-8 であり、白色の地にらせん状に黒色の帯が塗られていた。同様の例はハラガの中王国時代の墓地からも出土している (Engelbach 1923: Pl.LII)

#### g) 土器 (図 23)

土器はシャフト部および A 室から発見された。図 23-3、4 の半球形碗はベッセル・インデックスによる編年研究が行われているが、底部が失われているため正確な値が不明である。残存している部分から、同種の器形の中でも最大径に対して器高が比較的大きい部類に属していると推測されることや、口縁の立ち上がりが垂直かやや内湾しているという特徴から、R. シストルと A. ザイラーによる分類の Group 4 に属すると考えられ、アメンエムハト 3 世の治世から第 13 王朝に年代づけられる (Schiestl and Seiler 2012: 84-87)。図 23-8 は「ビール壺 (Beer Bottle)」と呼ばれている器形であり、R. シストルと A. ザイラーによるこの器形の分類では、Class 5 に相当すると考えられ (Schiestl and Seiler 2012: 672-673)、テル・アル=ダバア出土のものに類似しており (Schiestl 2012: 81, fig.5.5; Aston 2004b: pl.42.149; Szafranski 1998: pl.4.16)、第 13 王朝初期に年代づけられている。

### 3. まとめ

今回の第 18 次調査でも、中王国時代、新王国時代の 2 つの時代の埋葬において興味深い資料を取得することができた。

シャフト 84 では少なくとも 3 体の新王国時代の人型木棺が出土しており、共伴する土器や木棺顔部の表現からアメンヘテプ 3 世治世頃に年代づけられる可能性があり、その場合この遺跡の中でも特に古い時期に造営されたことになる。整理中のため本概報には掲載できなかったが、この墓からは他にも数多くの木棺片が発見されており、今後分析を進めていく必要がある。シャフト 105 からは多種多様な副葬品のセットを得ることができ、残存状況の良いアンフォラから、埋葬が行われた年代はラメセス 2 世の治世以降と推測することができた。

シャフト 106 ではステラ型祠堂、石灰岩製のカノポス壺、木製模型、ファイアンス製の擬似供物など、この遺跡においては新出の資料を数多く得ることができた。シャフト部から発見されたステラ型祠堂は極めて稀な遺物であり、地上部には石灰岩ブロックが発見されているなど、これまであまり知られていなかったシャフト墓の地上部の状況を明らかにする上で有用な情報を得ることができた。

「夕」墓周辺で集中的に発掘を行ってきたことで、墓域の西端における様相が明らかになりつつある。今後も調査継続することで、墓域全体の形成過程や埋葬習慣を考察するための資料を蓄積していきたい。

#### 註

- 1) 第 18 次調査の隊員構成は次の通りである。隊長: 吉村作治、現場主任: 矢澤健、考古学班: 近藤二郎、馬場匡浩、高橋想、北村玲、堀内則子、建築学班: 西本真一、X 線分析班: 宇田応之、サイバー大学世界遺産学部実習生:

荒木利美、大橋陽子、渉外：吉村龍人、ムハンマド・アシュリー。

- 2) トトメス3世以前のは、シャフト84から出土したものより丸みを帯びており、幅広である。ツタンカーメン王の治世からラメセス2世の治世はより細身である (Aston 2004a: 188-189, Fig.6, 7)。図5-9の尖底のアンフォラは細身だが、胴部以上の形状が不明であることや、シャフト部から出土して地上からの混入である可能性もあり、シャフト84の埋葬の年代を考える上で注意が必要である。
- 3) シャフト墓の掘削工程の研究から、床面を下げる際はまず壁際を溝状に掘り下げることがわかっている (柏木2009: 24, 図6)。
- 4) 胎土の分類はウィーン・システムに準拠している (Nordström and Bourriau 1993: 168-182)。以降の土器の胎土に関する記述も同様である。
- 5) 模型の副葬は第11王朝に一般的であり、第12王朝センウセレト2世の治世になると減少するとされる (Bourriau 1991: 11)。

## 参考文献

- Andrews, C.  
1994 *Amulets of Ancient Egypt*, London.
- Arnold, Di.  
1992 *The South Cemeteries of Lisht, vol 1: The Pyramid Complex of Senwosret I*, New York.
- Arnold, Do.  
1988 "Pottery," in Arnold Di., *The South Cemeteries of Lisht, vol 1: The Pyramid of Senwosret I*, New York, pp.106-149
- Aston, B.G.  
1994 *Ancient Egyptian Stone Vessels: Materials and Forms*, Heidelberg.
- Aston, D.A.  
2004a "Amphorae in New Kingdom Egypt," *Ägypten und Levante XIV*, pp.175-213.  
2004b *Tell El-Dab'a XII: A Corpus of Late Middle Kingdom and Second Intermediate Period Pottery*, Wien.
- Bourriau, J.  
1988 *Pharaoh and Mortals: Egyptian art in the Middle Kingdom*, Cambridge.  
1991 "Patterns of Change in Burial Customs during the Middle Kingdom," in Quirke, S. (ed.), *Middle Kingdom Studies*, Kent.
- Brunton, G. and Engelbach, R.  
1927 *Gurob*, London.
- Fried, R.  
1987 *Rameses the Great: His Life and World*, Tennessee.
- Friedman, F.D.  
1998 *Gifts of the Nile: Ancient Egyptian Faience*, London.
- Kozloff, A.P., Bryan, B.M. and Berman, L.M.  
1992 *Egypt's dazzling sun: Amenhotep III and his world*, Cleveland.
- Lapp, V. G.  
1994 "Die Stelenkapell des Kmz aus der 13. Dynastie," *Mitteilungen des Deutschen Archäologischen Instituts Abteilung Kairo 50*, Mainz am Rhein, pp.231-252.
- Nordström, H.A. and Bourriau, J.  
1993 "Ceramic Technology: Clay and Fabrics," in Arnold, Do. and Bourriau, J. (eds.), *An Introduction to Ancient Egyptian Pottery*, Mainz, pp.143-190.
- Petrie, W.M.F., Brunton, G.  
1924 *Sedment II*, London.
- Ranke, H.  
1935 *Die altägyptischen Personennamen I-III*, Glückstadt, Hamburg and New York.
- Raven M. J.  
1991 *The Tomb of Iuruf: a Memphite Official in the Reign of Rameses II*, Leiden and London.
- Schiestl, R. and Seiler, A.  
2012 *Handbook of Pottery of the Egyptian Middle Kingdom, vol.I, II*, Wien.
- Szafranski, Z.E.  
1998 "Seriation and Aperture Index 2 of the Beer Bottles from tell El-Dab'a," *Ägypten und Levante VII*, pp.95-119.

柏木裕之

2009 「エジプト、ダハシュール北遺跡から発見された中王国時代のシャフト墓の掘削工程について」、『西アジア考古学』vol.10、日本西アジア考古学会、pp.19-32.

吉村作治、近藤二郎、長谷川奏、馬場匡浩、中川武、西本真一、柏木裕之

2005 「エジプト 早稲田大学ダハシュール北地区発掘調査報告―2004年 第9次調査―」、『人間科学研究』第18巻第1号、早稲田大学人間科学部、pp.109-118.

吉村作治、近藤二郎、矢澤 健、柏木裕之、秋山淑子

2011 「Ⅲ. 第15次調査概要」、『エジプト学研究』別冊第15号、早稲田大学エジプト学会、pp.61-83.

吉村作治、馬場匡浩、近藤二郎、長谷川奏、柏木裕之、秋山淑子

2009 「エジプト ダハシュール北遺跡発掘調査報告―第10次・第11次発掘調査―」、『エジプト学研究』第15号、早稲田大学エジプト学会、pp.5-38.

吉村作治、馬場匡浩、近藤二郎、西本真一、柏木裕之、矢澤健

2010 「エジプト ダハシュール北遺跡発掘調査報告―第12次・第13次発掘調査―」、『エジプト学研究』第16号、早稲田大学エジプト学会、pp.5-46.

吉村作治・矢澤 健・近藤二郎・馬場匡浩・西本真一・柏木裕之・秋山淑子

2012 「エジプト ダハシュール北遺跡発掘調査報告―第16次・第17次発掘調査―」、『エジプト学研究』第18号、早稲田大学エジプト学会、pp.21-67.

エジプト学研究 第19号

2013年3月31日発行

発行所 / 早稲田大学エジプト学会

〒169-8050 東京都新宿区戸塚町 1-104

早稲田大学エジプト学研究所内

発行人 / 吉村作治

The Journal of Egyptian Studies No.19

Published date: 31 March 2013

Published by The Egyptological Society, Waseda University

1-104, Totsuka-chyo, Shinjyuku-ku, Tokyo, 169-8050, Japan

© The Institute of Egyptology, Waseda University